

朝霧や圓十郎の二三輪
古庭の薺さきぬ霧の中
南瓜や絲瓜の從弟茄子の叔父

仲國訪小宮圖

女郎花の宿を尾花に尋ねばや
敲けども薺咲て明家なり
萩垣や萩の葉隠れ釣燈籠
撫子の種つるしたり花もある
種に刈る桔梗長く花一つ
秋もはや桔梗の名残花一つ
桔梗刈て菊の下葉の枯し見ゆ
芳原詞の内
うら返す葛の葉亂り心地なる
こてくと草花植し小庭哉

根岸雜咏ノ内 四句
貧しさや葉生姜多き夜の市
片側は鶯谷の芒かな
芋阪に芋を賣らす圓子賣る小店
薺に朝商ひす篠の雪

根岸名所ノ内

草花に茶代を吝む鶯花園
冬瓜や霜ふりかけし秋の色
我境涯は
萩咲て家賃五圓の家に住む
雞頭の下にごみ焚く墓場哉
蓮の實の皆西へ飛ぶ夕哉
蓮の實の天女五衰の夕飛ぶ
蓮の實の飛ばで小僧に喰れたる

蓮の實は飛びぬ馬見所は崩されぬ
蓮の實の飛ばねど淋し本願寺
極樂は蓮の實飛で月丸し
紅蓮の實飛びぬ白蓮の實も飛びぬ
蓮の實の飛ばすにくさるものもあらん
花いけに蓮の實いけて飛ぶを見ん
結伽こゝにして蓮の實の飛ぶ音聞ん
山葛の風に動きて旅淋し

祝結婚

君か植ゑし秋海棠も甲斐ありき
萩寺の屏風に萩の發句哉
芒より一尺高し女郎花
道端に白粉花咲ぬ須磨の里
稻つんで子供載せたる車哉

毒草のうつくしき實を結びけり
蔓草を引けばしたゝかに實の落る
草の實を摘まんとすれば木の實落つ
草の實や鎌倉古りて墓多き
草の實のこぼるゝ谷やかけす鳴く
湯治場へ草の實多き山を下る
喰へさうな草の實見ゆる葎哉
草の實の赤くして馬もくはざりき
初旅をなぐさめ顔の野菊哉

病牀

七日月庇の下に萩の上に
杉の下に野菊咲きたる誰が冢ぞ
杉垣に稻干してある門の脇
萩の風書燈消えんとしてあかる

秋海棠に齒磨こほす端居哉
子を負ふて唐稚かじる子守哉
粟の穂に鶉かくれて見えすなりぬ
粟刈りて黍にむらかる雀哉
粟畑を前に網張る男哉
旅人の荷にかけし粟の一穂哉
草鞋の緒結び居れば粟穂笠を打

送漱石

萩芒來年逢んさりなから
萩に立て萩の句記す手帳哉
へちまとは絲瓜のやうなものならん
松の下にいくち多く生えて古き庭
桔梗折れば撫子恨む女心
萩枯れて鄰の菊を妬みけり

笑つては飛び怒つては飛び蓮實無し
蓮の實曰く豊干饒舌と終に飛ぶ
雞鳴て里ゆたかなり稻の花
萩によらで蝶の過行く恨哉

前書あり二句

萩芒今年は見たり來年は
萩咲くや生きて今年の望足る

有感

萩の風さぞや都は砂ほこり
汽車道のあらはに蕎麥の莖赤し
松を伐てうれし小菊に旭のあたる
紫のふつとふくらむ桔梗哉
枝ぶりの手折るに安き桔梗哉
蓮の實の飛や出離の一大事

後から朝日さす菊の花壇哉
谷の家や朝日に育つ菊少し
唐辛子に朝日さしたる飯時分
廣き葉に朝日のあたる芭蕉哉
黍刈て檐の朝日の土間に入る
日まはりに朝日よくあたる裏家哉
菊花壇の障子をあぶる西日哉
門の内に菊つくりたる小料理屋
旗立てゝ菊人形の日和かな
古庭の芒散る菊の苔かな
菊の宴に菊の蒔繪をほ心なきし
大菊に吾は小菊を愛すかな
御所の雨 雨上り菊拜觀の草履哉
小雨して小袖に菊の香をしたむ

(初五盧子の置きかへたるなり)

二三本菊倒れ伏す草の雨
横町につゞきて菊の夜店哉
菊年々天長節の日和順
稻籬國旗立てたる村見ゆる
屋根葺のごみ掃落す芭蕉哉
家土産の松茸匂ふ夜汽車哉
貧村に寺一つあり破れ芭蕉
鉢植の唐辛子喰ふ世帯哉
夕顔の貧に處る絲瓜の愚を守る
清貧の家に客あり蘭の花
金持の隠居なりけり菊つくり
富 百兩の蘭百兩の萬年青哉
大菊や金持めかす門構へ

我に菓物の好あり

毎日は葡萄も喰はず水薬
大なる松茸に逢著す端山哉
南天の實をこぼしてや鳴く雀
薦まとふ塚に窓あり家中町
我今年牡丹に病んで菊に起きし
薔薇を移して跡に苔の菊を植ゑし
松茸は茶村がくれし小豆飯
碧梧桐先づ到る
虚子を待つ松茸餅や酒二合
茸狩の歸らんとする女かな
つれの者の松茸取りし妬み哉
熊手持つ女案内す菌狩
五六本竝ぶしめぢや氣のあせり

茶茸得て歸る小山のしめぢ哉
紅茸の捨るに惜き籠の中
松茸を得ずして歸る女哉
米價騰貴して人食に飽かず

一升到五合ませたる陸穂哉

冬

(時候)

ツ引いて棒杭寒き入江かな
此歳暮易の面も覺東なし
戸をあけて愛す小春の小山哉
四十にて子におくれたる寒さ哉

虚乳子より贈られて

冬されの厨に京の柚味噌あり
冬されの小村を行けば犬吠ゆる

皇太后陛下御病氣

この寒さ神だちも看とり參らせよ

人住まぬ別荘寒し檜木原
よらで過ぐる京の飛脚や年の暮

皇太后陛下崩御 十旬

御灯青く通夜の公卿衆の顔寒き
召したまふ御聲もなくて寒き夜や
世の中のひつそりとなる寒さ哉
崩御遊ばさる其夜星落ち雲こぼる
御船前に眞神隠れ灯の寒さ
平民の御悔み申す寒さ哉
御停止や鳥啼いて晝の鐘こぼる
涙さへ盡きて餘りの寒さかな
女房泣く聲牙えて御所の夜更けたり
物部の手に劔寒し叟のしるし
蜻蛉の地藏なぶるや小春の野

王子

追々に狐集まる除夜の鐘
出家せんとして寺を思へば寒さ哉

碧梧桐天然痘にかゝりて入院せるに違す

寒からう痒からう人に逢ひたからう

救大救にあふて囚手あ人らみ薄き衣寒に泣しく

冬されの厨に赤き燕かな

青山や弔砲鳴つて冬の行く

いもくひながら四谷歸る夜の寒かりし

蜜柑を好む故に小春を好むかな

追剝草庵の出るかくと衿寒き

冬さびぬ藏澤の竹明月の書

牙ゆる夜や女ひそかに劍習ふ
雲もなき不二見て寒し江戸の町
毒龍を静めて淵の色寒し

叡山

將門の都睨みし山寒し
畑の木に烏籠かけし小春哉

根岸名所の内

かいまみる寒竹長屋冬の婆
薔薇赤く菊猶存す冬の庵
フランスの一輪ざしや冬の薔薇
冬の夜やいり物くふて詩會あり
離火坎水夫婦喧嘩に年くるゝ
占ひのつひにあたらで歳暮れぬ
笠竹に塵なき冬の机かな

借り家や冴ゆる夜近き汽車の音
臨月の師走二十日も過ぎてけり
傾城を見たる師走の温泉かな
詩一章柿二顆冬の夜は更ぬ
水仙の僅に咲て年くれぬ
吉原を通れば除夜の太鼓哉
焼跡の柱焦げて立つ寒さ哉
新宅の柱巻きある寒さ哉
王孫を市にあはれむ師走哉
冬に入りて菊存す庵や岡の北
有感
つくくと來年思ふ燈下哉

(人事)

柴垣に紙衣干したる小家哉
戸を叩く女の聲や冬籠
いもの皮のくすぶりて居る火鉢哉
法律の議論はじまる火鉢哉
穴多きケットー疵多き火鉢哉
丈八のお駒をなぶる火鉢哉
火鉢抱いて灰ませて石を探り得たる
わびしさは炭團いけたる火鉢哉
小説の趣向つゞまらぬ火鉢哉
醫師の宅や火鉢に知らぬ人と對す
火鉢の火消えて何やら思ふかな
いとし子に赤き頭巾を冠せたる
頭巾著て饅餡くひ居る男哉

御姿は夢見たまへる衾かな
もろくの樂器音なく冬籠る
澳のせんかたもなく喪に籠る

岡田人の服役を免す

あかじりの手をいたはりて泣く夜哉
炭はねて待人遅し鼠鳴く
爐開や赤松子われを待ち盡す
若き尼紅梅の枝に大根干す

碧梧桐天然痘にかかりし由聞て

もの神の火鉢の上にあらはれし

同じ時盧子に違す

爲朝を呼んで来て共に冬籠れ
三年にして歸ればわが子髪置す
煙草盡きて酒さめぬ獨り火鉢に倚る

かたき討つて頭剃りたる頭巾哉
納豆喰ふて兒學問に愚なり

大妻

黒わくの手紙受け取る冬籠
いも屋の前に焼けるを待つ下女子守なんと
ケットーの赤きを被り本願寺
縮緬の衿巻臘虎の帽子かな
ひじの顔にリスリンを多くなすりたる
毛布被りたるがまじりし寄席の歸り哉
停車場の椅子に襟巻を忘れしよ
襟巻に顔包みたる車上かな
四角なる冬帽に今や歸省かな
冬帽の我土耳其といふを愛す
冬帽の十年にして猶屬吏なり

消燈の鐘鳴り渡る煖爐かな
つきくしからぬもの日本の家に煖爐
ストーヴに濡れたる靴の裏をあぶる
外套の剝げて遠東より歸る
外套を著かねつ客のかゝへ去る
喰ひ盡して更に焼いもの皮をかじる
焼いものとするく風呂敷に烟立つ
焼いもの水氣多きを場末かな
手袋の左ばかりになりになる
メリヤスの手袋しつ下女水を汲む
子供がちにクリスマスの人集ひけり
クリスマスに小さき會堂のあはれなる
入管を親父見送る朝まだき
盗人らしきが鍋焼を喰ひ居たる

鍋焼を待ち居れば稻荷様と呼ぶ
鍋焼を待たんかおもを喰はんか
冬服の胸あひかぬる古著哉
道場の隅に火のなき火鉢哉
割木さげし寒稽古の人むれて行く
寒聲は寶生流の謠かな
寶生の觀世のゝしる火鉢哉
兄弟の子が喧嘩する蒲團哉
人も來ぬ根岸の奥よ冬籠
貧しけれど雪車と雪沓と馬二匹
火鉢二つ二つとも缺けて客來らず
一年の心の煤を拂はゞや
埋火や溢茶出流れて猫睡る

來山は消し炭淡々はいぶり炭

芳原詞ノ内 二句

綿入の袂探りそなじみ金
木瓜の紋なつかしき蒲團哉
芭蕉忌に參らずひとり柿を喰ふ
我は京へ神は出雲へ道二つ
水に映る火事は堀端通り哉
森の上に江戸の火事見ゆ夜の曇り
火事の鐘に雨戸あくれば月夜哉
振返る二重まはしや人違ひ
絲赤く手袋の破れ繕ひし
紺足袋の下女になじみやいもの錢
芭蕉忌の下駄多き庵や町はづれ
故郷の巨燧を思ふ峠かな

年忘酒泉の大守鼓打つ
小障子の隅に日あたる冬籠
切疵もまじりぬ下女か指の舐
袴著て手の凍えたる童哉
さめくと狂女泣居る十夜哉
來年の曆もはりぬ古曆
穴荒て狐も留守よ神の供
藥喰の鍋氷りつく朝哉
枯菊に煤掃き落す小窓哉
煤掃や長持を昇く女業
煤掃の音はたとやむ晝餉哉
煤掃の箒けたましまし成らぬ戀
病む人の佛間にこもる煤はらひ
長屋中申し合せて煤拂

(煤拂を申合せし長屋哉)

煤掃の日をふれまはる差配哉
煤掃の過ぎて會あり芭蕉庵
ひそやかに煤掃く家や嵯峨の奥
うらなひの來ぬ夜となりぬ鉢叩
冬籠る家や鯛を焼く匂ひ
燕引く頃となりけり春星忌
燕村忌に會して終に年忘
神の留守を風吹く宮の渡舟
煤掃いて柱隠しの跡白し
もたれよる柱ぬくもる冬籠
地震て冬帽動く柱かな
冬籠柱にもたれ世を觀す
勤當の胼なき足をいとしかる

醒潤れて力無き蠅の朝な夕かに呼び來る納豆の辛き世こそ

思ひやられる

豆腐屋の來ぬ日はあれど納豆賣
納豆買ふ屋敷もふえて根岸町
どてら著て長脇差の素足哉
火桶張る嬭一人や岡の家
燕村忌や燕よせたる浪花人

(天文)

水鉢や雀囀みあふ雪の竹
ちらくと障子の穴に見ゆる雪
雪此夜積まんといひて寐ぬる哉
静けさに雪積りけり三四尺
井戸端や水汲む女雪をかこつ
ちらくと雪になりしか又止みぬ

道ばたの冬菜の屑に霜白し
二三人火を焚く雪の木の間哉

國中表 二句

黒き旗に雪ふりかゝり人稀なり
雪となり雨となり旗半ばなり

皇太后崩御

廣朝や馬も通らず寒の雨
厠出て雨戸あくれば冬の月
凧の寺は釣鐘一つなり
霰やんで笠ぬげば月空に在り
舟呼べば答あり待てば雪ちら／＼
霜に寐て案山子誰をか恨むらん
北風に向いて堀端通りかな
北風に鍋焼餛飩呼びかけたり

雀をり／＼雨戸の内に入りて寐るは吾の機を忘れたるにや
はた人住まぬ家と思へるにや

住み荒れて雀来て寐る縁の霜
大雪になるや夜討も遂に来ず
大雪や狼人に近く鳴く
雪にくれて狼の聲近くなる
狼の吾を見て居る雪の岨
狼のちらと見えけり雪の山
酒さめて楓橋の夢霜の鐘
芳原詞の内
居つゞけに秃は雪の兎かな
根岸名所の内
門とさす狸横町の時雨哉
松にしぐれ杉に鶯鳴く夕日哉

辨當提げて役所を出れば夕時雨

夢ニモアラズ如ニモアラズ

凧に誤つて火を失す後陣哉

馬糞見る夷に近き原の霜

から城に鶴さわぐ霞かな

送別

雪に明けて星のあたりや君か馬

凱旋や天子見そなはす鬢の霜

十萬の獨體の夢や草の霜

子を捨つる女と見ゆれ冬の月

富士

雪を撃ぐ蓮花一千四百丈

渡し場や下駄はいてのる舟の霜

凧の北に國なし日本海

(地理)

水多き冬田の慈姑枯れて立つ

人もなし夕日落ちこむ枯野原

君と共に葦摘みし野は枯れにけり

葬禮の二組つゞく枯野哉

水深く水草見ゆる冬田哉

旅二人話盡きぬる枯野哉

道連の無口なりける枯野哉

(動物)

水鳥や籠の池に群れて居る

海鼠黙し河豚嘲る浮世かな

乾鮭は魚の枯木と申すべく

乾 鮭 の 切 口 赤 き 厨 かな
河 豚 譏 して 鮭 死 す 海 鼠 黙 々 たり
老 僧 は 人 に あ ら ず 乾 鮭 は 魚 に 非 ず
熊 賣 つ て 乾 鮭 買 ふ て 歸 り けり
乾 鮭 や 市 に 隠 れ て 貧 に 處 す
乾 鮭 の 獨 體 に 風 の 起 る 哉
孟 子 乾 鮭 を 好 み 荀 子 河 豚 を 愛 す
乾 鮭 北 より 柚 味 噌 南 より 到 る
乾 鮭 は 成 佛 し た る 姿 かな
鯨 煮 つ づ 鋸 打 ち し 一 伍 一 什 を 話 す
鯨 逃 げ て 空 し く 歸 る 小 舟 かな
一 休 の 糞 に な つ た る 海 鼠 哉
切 に 誠 む 海 鼠 に 酒 を の む 勿 れ
二 村 の 男 女 あ つ ま る 鯨 哉

寒 餅 を 尋 ね て 市 に 鯉 を 得 つ
水 鳥 の 晝 眠 る 池 の 静 さ よ
水 鳥 や 焚 火 に 逃 げ て 洲 の 向 ふ
矢 は 水 に 入 る 水 鳥 の 別 哉
枯 菰 や 水 鳥 浮 て 沼 廣 し
不 忍
待 合 や 水 鳥 鳴 て ぬ る き 爾
水 鳥 や 礫 と じ か ぬ 濠 の 隅
水 鳥 や 榮 華 の 夢 の 五 十 年
旅 に して 水 鳥 多 き 池 を 見 つ
水 鳥 や 盜 人 歸 る 夜 明 方
水 鳥 に 松 明 照 す 夜 の 人
か ら 鮭 の さ し み や 鴨 は も ら ひ 物
占 へ は 噓 噓 河 豚 に 咎 な し

庫裏腥くある夜海鼠の怪を見る
鯨突く小舟は沖に見えずなりぬ
荒磯や鯨の舟を待つ妻子
七尺の男なりけり鯨賣
鯨突に通り合せし旅路哉
お長屋の老人會や鯨汁
灯ともして鯨にさわぐ小村哉
房州の沖を過行く鯨哉
銜取て鯨に向ふ男かな
鷹据て人憩ひ居る野茶屋哉
獻上の鷹通る居る野茶屋哉
獻上に据ゑりて行く野茶屋哉
獻上に据ゑりて行く野茶屋哉
鯨突く日本海の舟小し
鯨逃げて北斗かやく海暗し

木兔を馬鹿にしにくる雀哉

(木)

聳えたる枯木の中や星一つ
杉垣に山茶花散るや野の小家
ほろくとありりの木葉もえてなし
岡ぞひの家低く屋根に木葉哉
團栗の共に掃かるゝ落葉哉
榎とは知れる榎の落葉哉
椋庭の木に尾長鳥来て居る落葉哉
吹きおろす木葉の中を旅の人
宮守の賽錢ひろふ落葉かな
林間や落葉掻く子に夕日さす
椎の實をま探じする榎の落葉哉

冬木立鳥啼きやんで飛ぶ音す
寺ありて小料理屋もあり冬木立
一村は竹藪もなし冬木立
其中に棚の境や冬木立
枯葉朽葉中に銀杏の落葉哉
復の封や昔の妻の返り花
山茶花に鈍屑吹く柱立
岡ぞひの蕎麥まだ刈らぬ落葉哉

(草)

きのふけふ枯菊がちになりけり

皇太后崩御 二句

御儉徳を水仙にたとへ申さんか
冬枯に漏れたまはぬぞ是非もなき

枇杷の花散りて石落今を盛りなり

根岸の草庵に故郷の耕燕をおくられて

耕の燕の三河嶋菜に誇つて曰く
冬枯の様や芭蕉も義仲も
水仙や晋山の僧黄衣なり
古道や馬糞日の照る枯芒
草枯や囚徒飯くふ道普請

題アキノ圖

枯芒さすが女に髯はなし
物踏で枯草になする雪踏哉
枯芝にこぼるゝ冬の薔薇哉
草枯れて武藏野低きながめ哉
花ながら下葉枯行く小草哉
草枯や矢をはぐ夷髯長し

草枯や埋井の底に夕日さす
とげの木に蔓草枯れて茶色の實
水草や水あるか^方たに枯れ残る
黄菊白菊皆枯草の姿かな
枯るゝ草枯れぬ小草の日陰哉

鎌倉

三代の嵐九代の落葉かな
冬枯や郵便箱のなき小村
水仙に黝隠るゝ明家かな
枯菊に庭一ばいの日南かな
新宅記
水仙も處を得たり庭の隅
枯葛の草鞋にかゝる日は暮ぬ
市に住んで葱買ひに行く鄰哉

豚盡きて葱を貪る主かな
武藏野の明星寒し葱畑
葱にそふて寒菊咲ぬ鶴鶴
野と隔つ垣破れたり葱畑
背戸廣し根深の果の遠筑波
二三本葱買ふて行く人貧し
普化宗の寺の跡なり葱畑
江戸の市に白根の長き根深哉
背戸へ出て蕪洗ふ人や川向ひ

萬里長城

冬枯の北を限りて城長し
庭前撮影
水仙の日向に坐して寫眞哉

明治三十一年俳句未定稿

新年

竹の軸は去年の掛けふるし水仙と梅とを庭部鏡の瓶に挿みて

就中梅元日の姿なる
元日や鶴も飛ばざる不二の山
うれしかる子に元日の曇りけり
宮人や御爽に籠る松の内
祝新婚 二句
年玉や同穴の契り番ひ鴨

元日を天地和合のはじめ哉

題猿圖

猿曳を親猿と思ふ夜もあらん
戸あくるや萬歳來る東より
福引の座敷を照すラムブ哉

新聞雑詠 五句

蓬萊にテールブル狭き硯哉
聖徳を頌する文や筆始
元日の雨を記すや屠蘇の酔
恭賀新禧一月一日日野昇(廣香)
新聞を門で受け取る初日哉
輪かさりや町人這入る勝手口
輪かざりに締切である小門哉
四方拜のお庭の霜や初鴉

よき衣の枕邊に在り初鵝
いもうとの羽子板すこし劣りたる
羽子板や十五かしらに皆女
福引に恥をかきたる女哉
福引のよき者取りしはした哉
裾を引く妻の立居や三ヶ日
年こゝにあらたなる梅の苔哉
遣羽子や誰が塗られて笑ひ聲
女王祿やねびまさりたる御笑顔
笑ひあふ十日夷の烏帽子哉
裏門の輪飾人に取りられけり
門番に餅を賜ふや三ヶ日
御所の門門松もなき尊さよ
赤門の橙小き飾り哉

めでたさも一茶位や雑煮餅
病牀に蜜柑剥くなり屠蘇の酔
此山の黍の雑煮や日本一
才藏は葛西あたりの訛かな
萬歳は今も烏帽子そ都鳥
猿曳の綱のばしたる一間哉
猿曳や若君抱きしお乳の人
洗濯や追ひ返したる猿廻し
雑煮くふてよき初夢を忘れけり
里昂製のテーブル掛や福壽草
取合や梅に鄙しき福壽草

春

(時 候)

犬吠 夜やえ 誰を足 咎む 近るし 犬の 聲
 春の 夜や 鄰を 起す 忍び 聲
 遅き 日の 四時 打ち ぎりし 時計 哉
 魚市 に 魚の 少き 餘寒 哉
 籠 夜や 一騎 東へ 白き 母衣
 緑日 の 油煙 に 春の 夜は 更ぬ
 うたゝ 寐に 風邪 引く 春の 夕哉
 病む 君に 春行 宿や 琴の 塵
 病人 に 酒し ふる 春の 名残 哉

春の 夜の 風邪 引聲 や 禿呼ぶ
 旅に 病んで 春の 蜜柑を 求めけり
 物に すねて 揚屋 出る 夜の 籠なる
 籠 夜や 嶋原 さして 小提 灯
 春の 日の 友訪 ふ 舟や 江の 東
 春寒 し 鶯 移る 江の 東
 京の 灯や 籠の 上る 東山
 春の 夜の 五條 東す 車哉
 七八 騎過 ぎ行 春の 小村 哉
 ものか はとい ひけん 春の 朝寐 哉
 のどかさ や象 引いて 行く 原の中
 紅梅 に 雲の かゝる 餘寒 かな
 のどかさ や障子 あくれば 野が見 ゆる
 暖き 座敷 の 庭に 洗濯 す

大船に汐^水汲んで居る日永かな
大家の一間に春の樂器哉
大勢のとよめく春の旅籠哉
寢殿の棟に繩を張る事
鳶にくむ心に春はなかりけり
春の夜の明けなんとする廓哉
初會かな臺に小さき春の鯛
酒の銘を耕撰と名つけて
狸々の影をたゝへて甕の春
春古りし三味線箱の題詩哉
春の夜の三味の空音や三味線屋
三味線を掛けて留守なり春の宿
刀鍛冶は庖刀鍛冶や御代の春

新聞雑詠

永き日や雜報書きの耳に筆

(人事)

忽然と風落ち來る小庭哉
風の尾をつかまんとする弟哉
夕嵐切風西に飛んで行
あがりつくうれしさを風きれてけり
切風の落行ききは淡路哉
しばし風受けつ梢のかゝり風
絲のべて風の尾垂るゝ水田哉
夕風や空に日暮るゝ風一つ
小き子の小き風を揚げて居る
狭き庭に一枚風の上りけり
威に堪へて大風きつて放しけり

凧切れて泣くく歸り行く兒よ
紫の雲も出て居る涅槃哉
梯子して凧取る屋根の童哉
めつらしく郊外にいで

めづらしや畑打つ女五年ぶり
初午に鶯春亭の行燈哉
雛の間やきのふ火燧を塞ぎけり
傾城の汐干見て居る二階哉
尋ねよる蓬か宿や草の餅
幼子や青きを踏みし足の裏
摘草や善き衣著たる女の童

(天文)

猫の祭も過ぎぬ臘月

雪解や竹はね返る日の表
病起縁にいづれば東風吹入る衣の裾
南より春風吹くや東大寺
開帳の東風に吹かるゝ祕佛哉
笛吹くは東の對よ春の月
浮き上る鯉の頭を春の風
寶積む船の著きけり春の風
枯蘆に春風吹けば目高哉
病人の顔出す窓や春の風
春風の船に酔ふたる女哉
檻狭し虎の尾をふる春の風
鳩抱いて遊ぶ童や春の風
春風や飛ばんともせず畑の鶴
春風の句を案じつゝ散歩哉

春風の文殼吹くや留守の宿
小城下に春風吹くや馬芝居
霞む日や鳶舞ひ落つる西の京
霜よけの垣の北側残る雪
陽炎や砂畫の跡の赤き砂
病癒えて門を出れば東風が吹く
ともし火の漏れて留守なり朧月
大門を出て朧なり土手の月
大佛の頭出したる霞かな
大兵の野山に滿つる霞かな
錦繪やお城の上の春の雲
春雨や配達叱る十時過

(地理)

宮嶋の廻廊浮くや春の海
上蔭の駕に逢ひけり春の山

(動物)

鶯や川そひ小路寺の裏
戀にうとき命婦のおもと老にけり

「韻文學」に題す

貫之の蛙芭蕉の蛙哉
水口に集まつて來る田螺哉

獨り何やら感じて

鶯も啼くそ雲雀も囀るそ

俳壇を退きし露石に 二句

とも知らで鳴くか蛙の哀なる
知るや蛙露石は今年聾なり

きぬ猫の別猫を見てやる夜明哉
小夜更けて永代行けば白魚取る
石垣や蛙も鳴かず深き堀
大聲に鳴き行く雁の名残哉
大聲に鳴いてきよろりと蛙哉
燕の過ぎ行くあとや傳令使
もとの巢へ燕の卵返しけり
新しき主に馴るゝ燕哉
燕の物くはへ來る晝餉哉
逢坂の山を越え行く燕哉
藍壺に泥落したる燕哉
川舟の窓を掠むる燕哉
吊したる駕籠の埃や燕の巢
首途の日に見初めたる燕哉

海苔亀朶に遊ぶ漁村の燕哉
江の嶋の蛤分つ土産かな
空家や孕み雀の夕稼き
蛤と海草をぬふ桶襦哉
吉原の火事映る田や鳴く蛙

富女北國より來る

行かんとして雁飛び戻る美人哉
鶯や縁に捨てたる小三味線
向きあふて歌ふ二つの蛙哉
ぎようくと地租を論ずる蛙哉

新聞

葡萄酒の蜂の廣告や一頁

(木)

江東に緑の早き柳哉
有明や白けて残る梅の西
錠かけて花見の留守や夫婦者
盆栽の梅散りかゝる硯哉
京に来てひたと病みつきぬ花盛
病人の門迄出たる柳哉
花に酔ふて頭痛すといふ女哉
東門の外に舎營す柳哉
城東に住みける桃の翁哉
桃赤し山の東の古砦
枝長く柳活けたる花屋哉
家主の無残に伐りし柳哉
柳枯れし跡に柳を植る哉
柳には柳の木こそ添ひよけれ

町の柳十本毎に灯をともす
本陣に幕張り廻す柳哉
裏門にかぶさる雨の柳哉
青柳の雨に鎖しぬ御成門
かりそめにさせし柳の芽をふきぬ
草臥て行手を望む柳哉
活けんとして柳置きたる疊哉
裏店にあり來りたる柳哉
待合や柳しだるゝ狭き庭
新道に緑少き柳かな
稍狭き二等道路の柳かな
市中にひねもす動く柳哉
鳥逃げて吹矢の落る柳哉
青柳や灯をともしたる石燈籠

金屏に風防く鉢の櫻哉
鉢裁の連翹に來る小鳥哉
唐人の辛夷を畫く座與哉
立琴にしだるゝ床の柳哉
紅梅女兒誕生の苔のやうな拳哉
板塀根岸や此横町も梅の花
梅遅き水戸街道や雲雀鳴く
百姓の家をめぐりて梅の花
海苔干した村を過ぎ行く梅見哉
取り合はぬ梅のけしきや庭の松
王城や大路の柳小路の花
大店の檐つらねたる柳かな

大木のつゝ見による(来る)に立つ野寺哉
海棠に大名とまる日は高し
大寺の松も櫻もなかりけり
女生徒の遊びところや絲櫻
垂れかゝるしたれ櫻や石燈籠
我病で櫻に思ふ事多し
花暮れし上野に虎の吼ゆる哉
我王の櫻咲くなり三十年
梅散るや海苔干す濱磯の沙曇
京町の火事や櫻は恙なし
水仙の花のさかりや桃の花
我病んで花の發句もなかりけり

落第の人を送るや梨花の花
雨に鎖す紗窓の外や梨花の雪
裏畑の小便溜や梨花の花
灯の映る閨の小窓や梨花の花
滅びたる國の形見や梨花の園
川崎を汽車で通るや梨花の花
實を盗む鄰の梨花咲ぬ
朝起の鏡に寒し梨花の花
鴉飛ぶ後園の月や梨花の花
麥荒れて梨花のさく畠哉
上野
兵燹に杉は残りて山櫻
病人の車で出たる花見哉
一群の藝妓に出逢ふ花見哉

上野 三句
晝中や櫻にこもる人の息
雨晴るゝ櫻に杉の雫かな
花の雨僅に晴れて群衆哉
無事庵より熊の内を送り來る
江戸櫻越後の熊を肴哉
京華日報發刊記
千萬言一時に開く櫻哉
山門に乞食三味ひく櫻哉
三味ならす子に錢投る柳哉
三味線に樽をかけたる花見哉
三味も彈き笛も吹く梅の主哉
上野
三味提げて大佛見るや花の山

常盤津の會ある寺の櫻哉
釵は花見戻りの女哉
榛の芽に毎日鳴くよ四十雀

寛都三十年祭

お祭の日和になりぬ花盛

上野 二句

花に群集松の葉白き埃哉
花の氣を杉の林にさましけり
夕暮の花散りかゝる群衆哉
暹櫻花見ぬ人の來りけり
稽古矢のそ高く飛たるる辛夷哉
馬車の上に垂るゝホテルの櫻哉
花の村にハネームーンの名残かな
遡る花の小川のポトト哉

雜報子報す公園の櫻咲く
権現や櫻もまじる杉の雨
佛壇に桃活けてある三日哉
桃咲くや古き都の子守唄

(草)

馬市のあとや馬糞春の草
草臥る青麥道や病ミ上り
春の草東に水の見ゆる哉
東門を出づれば野邊の董哉
下萌の小庭に來るや知らぬ雞
げんくを打ち起したる瘦田哉
等閑に董見て行く旅路哉
若草の頃習志野を通りけり

店先に蜜柑腐りぬ落の蓋
蒲公英やローンテニス線の外
蒲公英に描きそへたる土筆哉
蒲公英に人の参らぬ地藏かな
蒲公英の小路左へ分れけり
馬借りて蒲公英多き野を過る
萩の芽にさきだつ菊の根分哉
榛の木や大根花咲く畑の隅
蒲公英や記念碑を彫る路の端
蒲公英に砲臺古りし岬かな
名を埋む野邊や蒲公英一坏の土
庭に咲く蒲公英に詩の思ひあり
蒲公英や釣鐘一つ寺の跡
山吹や花散り盡す水の上

山吹の花くふ馬を叱りけり
古井戸や山吹散つて魚遊ふ
山吹の散るや盟の忘れ水
山吹の溝に垂れたる垣根哉
山吹に木瓜のまじりし垣根哉
等閑に山吹咲ける名所かな
山吹の花蹈みつけし蹄哉
山吹の流れ去りけり一しきり
山吹や尋ねあたらぬ乳母が家
山吹の花を渦巻く井堰かな
神の子の董の露を吸ふ晝かな
日本派の句集に晝く董かな
女生徒の遊ぶ處や花董
結婚を董に契る男女かな

(等閑に杜若さく
古江哉凡董)

フランスの董を封す書信かな
船長の愛す董の小鉢哉
日一日董の花に遊ひけり
花叟が腰折山の小杜若を贈りたるに
小包に小杜若のしをれたる
山吹や公事に上りて借屋敷
公事に勝ちて里に歸れば豆の花
麥の風菜種の花は散にけり
若草に線香たてたる地藏哉

夏

(時候)

藤の花末三寸を夏に入る
明け易き夜頃や富士の鼠色
九州に入りて五月のジャボン哉
短夜を二階に寐たる夫婦哉
二階にも住まれぬ町の暑さ哉
悪塗りきか朱へにて塗らきれて暑なりし仁王門
第三の石門涼し雲の上
炎天に鏡きらめく神輿哉

第十二講會解散

いろくの夢見て夏の一夜哉
借家の天井低き暑さ哉
須磨涼し唐人どもの夕餉時
古池や晝静かなる夏の鶯
中興寺
月に水涼しき夕神あらん
向嶋
涼しさや川を隔つる灯は待乳
戲道ノ不盡行ヲ送
神鳴の雲をふまへて星涼し
鳳亭新居
町暑し蕎麥屋下宿屋君か家
兩國
鶯の立つ中洲の草や川涼し

角田川邊

金持は涼しき家に住みにけり

長命寺

葉かくれに小さし夏の櫻餅

鳴雪翁久しぶりに句を示されければ

水無月の山吹の花にたとふべし

愚哉兩親ノ悼

水無月の涙も氷る思ひ哉

配達の別れ行く辻明易き

短夜や汽車走り行く枕元

(人事)

諸曲(班女)の詞を其まゝ

夕顔の花を晝きたる扇哉

衣更へて机に向ふうつし物
十年の病癒えけり更衣
我が前に来て見定めぬ競馬哉
蘆毛より栗毛は早し競馬
馬方は鞍に晝寐や馬歩む
旅にして妓樓に遊ぶ浴衣哉
汗くさき遊女と寐たり狭き花筵
晝顔や襦袢をしぼる汗時雨
焼土に汗たらし行車力哉
汗拭ふ向ふに高し雲の峰
老車夫の汗を憐む酒手哉
旅人の汗の玉散る清水哉
汗を吹く茶屋の松風蟬時雨
旅人や杖に干し行く汗拭

汗くさき行者の宿や夏の月
家に歸りて汗臭からぬ浴衣哉
つくくと汗の香に飽く旅寐哉
大岡の訴を聞く扇哉
灌佛を覗いて通る旅路哉
善き人の花の供養や佛生會
花御堂の花しをれたる夕日哉
灌佛や童集まる朝まだき
つゝじ多き田舎の寺や花御堂
げんくの下で佛は生れけり
筍の桶にたふふる甘茶哉
灌佛や浮世は罌粟の花盛
里寺の佛小さき甘茶哉
乞食に甘茶を分つ童哉

袋に新茶と書きて吊したり
新茶積む馬も来て居る汽車場哉
新茶入るゝ袋に古茶の名残哉
新茶選る僧と話すや小百姓
一枝の牡丹酬ゆる新茶哉
紙切に包む手製の新茶哉
したゝかに新茶のみけり蛙の夜
玉川の門に新茶の使哉
更衣狭山の新茶到来す
澁紙や新茶干したる縁の先
團扇持て小庭の月や夕歩行
祇園會や二階に顔のうづたかき
二階には娘住ませつ青簾
西日さす晝寐の腹や中二階

山門に旅商人の晝寐哉
門前の店や櫓と氷水
單物飄然として郷を出づ
あやまつて清水にぬらす扇哉
たはれをや扇の手わさ小さかしき
京の町にはでな扇を求めけり
物書いた扇を人に見られけり
六十を祝ふて贈る扇哉
小扇をはつれて見ゆる寐顔哉
紅扇十三にして舞をなす
發心の歌書き捨てし扇哉
檜扇に歌も書れぬ思ひ哉
京に来て扇購ふいとま哉
破れ易し人のかたみの夏羽織

號外や晝寐の夢を驚かす
其昔お妾なりし裕哉
筆を手に夏書の人の晝寐哉
晝寐する人も見えけり須磨の里
雷をさそふ晝寐の軒哉
酒臭き車夫の晝寐や蠅の中
晝寐さめて湖畔の森に遊ひけり
茶屋女廬生の晝寐起しけり
寺しんと晝寝の軒聞えけり
竹婆娑と晝寐の床に動きけり
地震して晝寐さめたり蒸暑き
晝寐さめて腕さするや疊の目
家に藏す甲冑朽ちて土用干

小^武藝^所者の^に蚊遣も焚かず夕化粧
夕間暮石槌詣歸りけり
盆栽の蓮に向ふや夕涼
文机に顔押しつけて晝寐哉
夏瘦の晝^朝飯くはぬ男かな
學校の試験過ぎたる晝寐哉
喰ひ残す蜜柑の皮の蚊遣哉
草を踏んでまむし恐るゝ單物
夏服は若殿ぶりの馬上哉
鉾竝ぶ四條通りや朝の雨
富士垢離は俱利迦羅紋の男哉
蟲干や洋書の間の枯櫻
夏休み來るべく君を待ちまうけ

淵水死りぬとの噂あり

車にて出遊
扇持たす
ひとへものもとより羽織などは著す

雨園

養澤な人の涼みや柳橋

鹿橋

夕涼石炭くさき風が吹く

入谷

暗き町やたま〜床屋氷店

髪結ふて古風な人の扇哉

田舎祇園祭

横町や祇園祭の西瓜店

人まねの團扇を使ふ小猿哉

古壘團扇に蟲をおさへけり

這ひいでし蟲おさへたる團扇哉

涼み舟團扇の端をぬらしけり
團扇さし團扇はさしてなかりけり
三代の米つき今に遊團扇
餅の句を題す餅屋の團扇哉
ひとり酔ふて物謠ひ出す團扇哉
はい原の團扇を送るたより哉
子を抱て葵祭の道の端
灯をともし廻り燈籠や夕涼

(天文)

草鞋はいて傘買ふ旅の五月雨
黄な旗を立てし棺や雲の峰
五月雨や小き蟲落つ本の上
夕立の騒ぎの中へ放れ馬

薫風に袂ふくらむ馬上哉
地車の轍の跡や五月雨
山吹の餘花に卯の花くだし哉

久松家新築落成

君います空のいらかや青嵐
青嵐上野の杜も庭の内
五月雨や鬼の血剝る羅生門
晝中や頭揃へる雲の峰
犬捨つる川に水無し雲の峰
幽霊の出る井戸涸れて雲の峰
夏雲や辰巳にあるを阿波太郎
夕立や南を見れば雲の峰
咸陽の燒跡廣し雲の峰
咲き滿つる葵の花や梅雨に入る

(しぐるゝや南に低
き雲の峰
几重)

たとひは略疲きのふは發熱

今日は又足が痛みぬ五月雨
薫風や煙草の煙吹ちらす
夕立に破れそめたる芭蕉哉
上州の山は夕立つけしき哉
三騎先へ一騎おくる、青嵐

角田河畔

同懷舊

泳ぎ場に人の残りや夏の月
十年前の夏の三日此夕
夕立に蟬の飛び行く日影哉
一人居る編輯局や五月雨

(地理)

夏川を涉りて更へぬ馬の沓
清水引く茶店の庭の笥哉
口つけて眉のぬれたる清水哉
旅人の顔洗ひ居る清水哉
小柄杓に鎖つけたる清水哉
汗臭き手拭洗ふ清水哉
かち栗に喉の乾きや山清水
一隅は清水つめたき小池哉
浅く見えて杓の届かぬ清水哉
もとかしく片手に掬ふ清水哉
西行の掬びあまりや苔清水
苔ともにすくひあげたる清水哉
手桶持つ人に清水を尋ねけり
夕暮を清水も飲まず急ぎけり

湯湖又魚

ねらはれし魚の命や山清水
人も居らず瓜ひやしたる清水哉
田の上や青みのうつる晝の月
夏山を出つれば美濃の廣さ哉
夏山や五十二番は岩屋寺

(動物)

時鳥癩をさまりし夜明方
老いぼれし鶯なくや野よのと小寺
藪寺や鶯老いて音にうとき
鶯の藤咲く山に老いにける
鶯は婆アとなりぬ時鳥
鶯の會は過ぎけり老いにけり

鶯の老を鳴くなり遅櫻
橋に鶯老いぬ初瀬の里
旅人の老鶯を聞いて居る
鶯や鴉は老いぬものなりけり
鶯の老いたるが多き山路哉
鉢植の花なくなりぬ時鳥
蝙蝠をうちそこなひぬ三日の月
蝙蝠にもがりは居らずなりにけり
夕榮に蝙蝠飛ぶや濱の町
五智如來蝙蝠飛で無住なり
松明に蝙蝠さわぐ窟かな
蝙蝠を捕へて來たる博士哉
蝙蝠に草鞋投げたる童哉
蝙蝠の飛んで出でける扉哉

(蝙蝠の晝飛ぶ聲や
五智如來 鳴き)

蝙蝠は飛んで五重の塔黒し
手ごたへにして蝙蝠を打落す
時鳥しはぶき聞ゆ堂の隅
松字に別る
匆卒に手を分ちけり時鳥
明寺によしなく入りて蛇の衣
野茨の花白うして蛇の衣
蛇のから荆棘足を傷る旅
撫子の花にあはれや蛇の衣
岩清水掬ばんとすれば蛇の衣
蛇のから山の小路に横はる
蛇のから瀧を見すして返しけり
道連の逡巡として蛇のから
下關や花かと思れば蛇の衣

草むらやちぎれく蛇の衣
蟬に遠く蛙に近し裏二階
時鳥雲にぬれたる朝の窓
水鉢や木の枝垂れて雨蛙
たはれをの袂に包む螢哉
網を手に人鮎を覗くけはひ哉
鮎釣の鮎釣の籠を覗きけり
簾捲けは山緑なり鮎鮎
玉川の鮎にくひあく一日哉
故郷の鮎くひに行く休暇哉
鮎の背に苔や生ふらん淵の色
時鳥一尺の鮎串にあり
水尾涸て鮎の死だる早哉
一群の鮎眼を過ぎぬ水の色

鮎飛んで晝静かなり長柄川
夜一夜蚊にくはれけり試験前
草の戸や蚊の餌に足らぬ一人者
水捨る草むらを蚊の鳴て出る
蚊の聲やうつゝにたゞく寫し物
君に侑む酒に侘しや蚊の屍
書を読むや蚊にさゝれたる足の裏
蚊の聲に馴れて遊女の眠り哉
蚊の多き根岸の庵や小説家
病人の起きて蚊を焼く夜半哉
狂人の忿然として蚊を叱す
あさましく松くひあらす毛蟲哉
正宗の刃にさはる蠅もなし
古家の槍長刀や孕蜘蛛

鮎釣の焼場を戻る夕哉
蝙蝠のぶら下りたる眞晝哉
川風の螢吹きこむ二階哉
螢籠に晝は死んだる螢哉
倅自侍居士
蠅どもは時を得顔や君逝きぬ
狸さへ慕さへ居らずなりにけり
根岸の床屋
石像に蠅もとまらぬ鏡哉
人力の森に這入るや蟬時雨
愛憎は蠅打つて蟻に與へけり
木乃伊取る人は歸らず閑古鳥

新聞 二句

蚤とり粉の廣告を讀む牀の中(新聞)
蚊にくはれ政黨論を艸しけり(同)
子供等の毛蟲葬る遊び哉

(木)

青梅に檐の曇りや時鳥
青梅や梅園の戸は鎖したる
梅の實を賣り拂ひたる入梅哉
青梅の下に集る童かな
梅の實の落ちて乏しき老木哉
青梅に鹽賣を呼ぶ戸口哉
石女の青梅探る袂哉
垣越に青梅盗む月夜哉
青梅に筍高し明屋敷

青梅や行軍を見る里の雨
上野山餘花を尋ねて吟行す
栗の花筍飯は過きにけり

草葎

圓栗の花散る檐や朝煙

病間あり 三句

椅子を移す若葉の陰に空を見る
若葉陰袖に毛蟲をはらひけり
若葉風病後の足の定まらず

草葎

圓栗の花掃き寄せる戸口哉
拳を打二階の影や夏柳
思ひかけず茂りの中の二階建
人寄せせる馬車の喇叭や花樽

湯治場や床几を移す新樹陰
枇杷の實に蟻のたかりや盆の上
柑子咲く酒屋の門や繩籬
夕榮や若葉の風の上そよぎ
梟の晝寐の夢や夏木立
晝の月風は若葉の上にあ

一念に贈る 二句

桑の實をくはさる君にジャボン哉
林檎なき國をあはれむジャボン哉
旅人を載せたる馬車や夏木立

日光

下關や百萬兩の鑿の跡

向嶋

水無月の餘花を尋ねて櫻餅

上野を過て

五年見ぬ山の茂りや兩大師

廣小路 二句

時計屋も夏桃店も埃哉

葉柳に埃をかぶる車上哉

向嶋 三句

葉櫻に夜は茶屋無し角田川

葉櫻や昔の人と立咄

渡し場に灯をともしたる茂り哉

(草)

牡丹剪て朝日淋しき小庭哉

河骨の花起き直るさでの跡

病僧を扶けまゐらす蓮見哉

病僧や杜若剪る手のふるへ

船著きの小き廓や棉の花

夏草や事なき村の裁判所

兄弟が瓜と茄子の訴訟哉

庭荒れて蜘蛛の囀多き薔薇咲ぬ

音もなし覗いて見ればけしが散る

泥龜の隠れて動く花藻哉

筍の縄ゆるびたる途中哉

筍の十丈にしてさみたるゝ

山里や筍に飽く麥の飯

掃除屋の長き筍くれにけり

馬の荷に筍長し麥の秋

嵯峨を行く筍藪の月夜哉

鉢植の竹に筍見え初めし

老僧の文と新茶と筍と

病間あり

椅子を置くや薔薇に膝の觸るゝ處
蟲のつく夏萩の芽を剪り捨てぬ
薔薇咲いて夏橙を貰ひけり
わが庭の覆盆子熟し雨多し
去年買ひし筍賣の來りけり
筍の一本生長えぬ罌粟の畑
薔薇を見る眼の草臥や病み上り

菓物の常食をやめて

薔薇ちるやいちごくひたき八ツ下り
尼寺の庭に井あり杜若
薔薇散て萩の葉青き小庭哉
麥藁の籠に盛りたるゆすら哉

内庭や雞の子群るゝ麥の稗
麥藁のたばよせかけし葵哉
積み上げし麥藁陰や里立の戀
麥刈の留守を蠶飼のいそかしき
桑畑や一畝の麥の刈らすある
隠居して五反の麥の主哉
穂の黒き砂地の麥や沙曇
麥畑に砲車引込む轍哉
刈り残す二畝の麥や梅雨に入る
凌霄や温泉の宿の裏二階
二階には牡丹生けたり姉の部屋
夏草や城門ありて城もなし
門の内に誰が投げこみし早苗哉
門破れて芭蕉漸く二葉半

わざと這はす葛の茂りや茶師の門
麥秋や樗咲きたる門構
垣破る瓜盗人は狐かな
ことぐく蟲の穴ある葉蓼哉
尼寺や尼がつくりし茄子畠
薔薇くれし軀みまかり薔薇咲ぬ
半日の嵐に折るゝ葵かな
麥の風五月の雲雀老いにけり
うつくしき駕通りけり麥の風
二階建の學校見えつ麥の風
麥の風ちひさき蛇の行へ哉
病僧の門出て歩む麥の風
青梅の林見えけり麥の風
浦風に穂遅き麥の亂れ哉

麥の風美濃路に馬を雇ひけり
麥の風故郷近くなりけり
紫陽花や赤に化けたる雨上り
麥秋や壯士村に入る仕込杖
夕顔に夕飯いそぐ蚊遣哉
晝顔や砂に吸はるゝ晝の雨
植替し百合の弱りや晝下り
凌霄の花に蟬鳴く眞晝哉
朝顔の苗に水やる眞晝哉
田舎路の馬車馬瘦せぬ草いされ
名も知らぬ草物凄き茂り哉
靄深き朝や蓮田の中を行く
世の中の朝飯前や蓮清し

夕顔に手銅さけんと契るへし
晝顔の花に乾くや通り雨

不折新居

葉雞頭の苗養ふや繪師が家

送種竹山人上富山

十丈の連開くや筆の尖
竿觸れて芭蕉の巻葉折らしけり
巻葉がちに一葉廣がる芭蕉哉
其中に兀と芭蕉の巻葉哉
連翹は散つて玉巻く芭蕉哉
二葉垂れて一葉玉巻く芭蕉哉
たのもしく巻葉ののびる芭蕉哉
丸き窓に巻葉のびたる芭蕉哉
移し植ゑて巻葉憐む芭蕉哉

庭を覆ふて芭蕉の巻葉とけにけり
巻葉とけて庭に塞がる芭蕉哉
入口や芭蕉玉巻く黄檗寺
雨の音巻葉とけたる芭蕉哉
十反の帆は巻いてある芭蕉哉
かたばみの花をめぐるや蟻の道

庭前

撫子や上野の夕日照り返す
旅人に合はぬ山路のいちご哉
阿蘭陀の昔更紗や薔薇の形カタマタ
薔薇の花マリーと呼ぶは妹なり

新開

浮草の心中話やつとまき物
夏草やベースボールの人遠し

水草の花の白さよ宵の雨

秋

(時候)

病癒えて雲見る秋の端居哉
夜道して癒ふるひ返す旅の秋
病人のうなされて居る夜長哉
吉原の踊過ぎたる夜寒哉
長さ夜や枕刀を置き直す
温泉に三度残る暑さも晝の内
箱根の晝に
瀧の音残る暑さもなかりけり

猿男歸京

蒲焼の土用も過ぎて歸りけり

小 園

家主が植ゑてくれたる松の秋
おしろいの花に残暑の日影哉
山遠しばつた高く飛ぶ秋日和
化けさうな行燈に寺の夜寒哉
調練の太鼓聞ゆる稍寒み

午前二時

行燈の消えなんとする夜長哉

午後十時

門閉ちて人起きて居る夜半の秋
秋暮るゝ奈良の旅籠や柿の味
書讀まぬ男は寐たる夜長哉
長さ夜や障子の外をともし行く

灯をともし向ひの山や秋の暮
犬を追ふ夜寒の門や按摩呼ぶ
羽織著る秋の夕のくさめ哉

元光院観月會 十一句

庭の灯に人顔映る夜寒哉
御佛と襖隔つる夜寒哉
向きあふて淋しき顔や秋の暮
佇むや森深く夜氣肌に入む
秋寒し佛にそゝげ般若湯
やゝ寒み文彦先生髯まだら
秋昔三十年の園子店(芋阪園子)
撥音や上野をめぐる秋の聲(琵琶)
頼朝も那須の與市も夜寒哉(同)
小紋はお鍋さゝやく夜長哉(同)

いく秋の酒のほまれや日本號
茶の音の林に響く夜寒哉
劫に負けてせめあひになる夜長哉
いろくの變化出て來る夜長哉
初夜過る根岸の町や秋の聲
萩刈りて芒に秋の夕哉
汽車の窓に首出す人や瀬田の秋
汽車に寐て須磨の風邪ひく夜寒哉
鷺ベン立てしインキの壺や秋の薔薇
大名を藁屋にとめる夜寒哉
旅籠屋にひとり酒のむ秋の暮
流れよる舟に人なし秋のくれ
貴人をとめて飯焚く夜寒哉

狐鳴く聲と聞くからに夜寒哉

草廬 二句

菱笠をかけて夜寒の書齋かな
藏澤の竹も久しや庵の秋
船に寐て行李を枕の夜寒哉
秋晴る、松の梢や鷺白し
ともし火をあてに舟よぶ夜寒哉
喧嘩せし子の寐入りたる夜寒哉
汽車の音の近く聞ゆる夜寒哉

(人 專)

正倉院

風入や五位の司の奈良下り
稻妻の遠くに光る火花哉

縁側に七夕祭る机かな
掃溜に捨てすもかなの團扇哉
つくくくと秋の團扇をながめけり
貸したがる禿も星に紅の帯
星に貸す赤禪もなかりけり
七夕に物貸す人もなき世かな
七夕に何も貸さざる男哉
蟲送り送りすまして歸りけり
松明やいなごもともに蟲送
松明に蟲の飛ぶ見ゆ蟲送
火や鉦や遠里小野の蟲送
門前の川に灯ともす施餓鬼哉
夜更けて施餓鬼の燈籠流しけり
水の音施餓鬼涼しき灯影哉

由緒ありて泥鰯施餓鬼と申けり
吉原や燈籠の花人の花
燈籠の夜に見初めたる遊女哉
燈籠に夜半の喧嘩や仲の町
吉原の燈籠見による月夜哉
夕餉はてゝ迎火を焚くいそぎ哉
迎火や心いそぎの夕間暮
迎火の消えて人來るけはひ哉
撫子に迎火映る小庭哉
迎火や墓は故郷家は旅
鳩の飛ぶ方に鳩吹く聲遠し
鳩吹の過ぎ行里や八ッ下り
鳩吹のだまつて通る嵐哉
子を連れて鳩吹過る小村哉

町を出てやがて鳩吹く聲すなり
鳩吹くや狐の宮のうしろ側
鳩吹きつゝ信太の森に這入けり
鳩吹を叱いさむる法師妻もなかりけり
鳩飛んで鳩吹聲はやみにけり
鳩吹のたくみも老いてしまひけり
五十年鳩吹く老の子も持たず
鳩吹の一人に落つる夕日哉
鳩吹や寺領の畑の柿林
憎まれて見にくき顔や相撲取
番附にひいき角力を評しけり
別家して盆なき家や琴の聲
午前八時

日三竿あるじが寐たる秋の蚊帳

手こたへは繩のきれたる鳴子哉
鎌倉に砧うつ家もなかりけり
角力取の見て居る辻の角力哉
花火あげて開く間を心落付す
紛れ入る狂女も共に踊哉
晝飯は精進餅や魂祭
午後六時
思ひやる今妻星の胸さわぎ
いちにはやく迎火焚きし鄰哉
夕榮や晝の花火の打終り
元光院観月會 二句
外にありや扇の骨の紋處(雑談ノ二)
羽打つて小天狗どもの踊哉(同)
粟の穂に倒たれれかゝりし鳴子哉

初すりのすみし小村や猿まはし
鳴子きれて粟の穂垂るゝみのり哉
道はたの初すり白や蓼老いぬ
僧の老の鳴子引く罪後世近し
鳴子引く僧の後生や白の餓鬼
鳴子引く家陰の粟や三坪程
初すりのほこりをかぶる野菊哉
駕に揺る新酒の酔や眠くなる
駕かきのすき腹に飲む新酒哉
警察の舟も繫漕ぎ行く花花火火舟舟
草の雨燈籠さげて通りけり
磊落は新酒を偷む事にあらず

(天文)

舟を出て月に散歩す遊女町
御白洲や膝つきする秋の霜
名月に飛び行く雲の行方哉
長刀の影も更けたり橋の月
月見ゆる瀧見ゆる宿をえらびけり
白川や秋の初風旅の歌
人寐ねて秋の初風吹出しぬ
都まだ秋の初の風暑し
雲見れば秋の初風吹くさうな
秋の風再び薔薇の蕾かな
雞頭は二尺に足らぬ野分哉
錦町虚子寓
桐や棕櫚や迫りし庭の秋の風
野分して萩をあはれむ泥まみれ

野分して蟬の少きあした哉
關の夜をめつたやたらの野分哉
鎌倉や島の上の月一つ
午後四時
秋風や通りかゝりし一の谷
同六時
宵月夜狐は化る支度哉
名月や鄰の琴に笛吹かん
草の露夜舟を上る草履哉
蟲干の残りや吹くや秋の風
吹き足らで雨となる朝の野分哉
笛の音や遠くに見ゆる月の人
須磨寺や月が出て居て初嵐
大家の寐静まりたる野分哉

陰曆八月十七日

朝曇り觀月會の用意哉

同元光院 四句

松陰や月待つ人の話聲
立待の關の話や五六人
ある僧の月も待たずに歸りけり
月待つや去年をとゝしの月を話す
宵關や野風吹くる草の音
關百里ぼつちり赤き月の端(月出)
月代も無くて月出る野末哉
月の出をのゝしる聲や岡の上
月の雲木の葉動かぬ雨氣哉
崖上る月の歩みや夜は静
琵琶一曲月は鴨居に隠れけり

月の琵琶壁のやもりも出で、聴け
月さすや碁をうつ人のうしろ迄
碁にまけて、剛に行けば月夜哉

元光院 九句

月曇る観月會の終り哉
有明に鬼と狐の別哉
三十六坊一坊残る秋の風
山魘に木魂答へて杉の月
瓶花露をこほす琵琶三兩曲
庭に酌むや芋も團子も露の中(觀月會)
月更くる庭の小草や酒の露(同)
名月や月の根岸の串團子(同)
精進に月見る人の誠かな(同)
夕焼けて日和になりぬ秋の雲

薄曇る空の濁りや天の川

元光院觀月會 八句

一群は庭に話すや草の露
宵闇や灯二つ見ゆる三河嶋
屋根に置く露の光や根岸町
月を待つ開たのもしき野の廣さ
月の出を斯う見よと坊は建てたらん
人しばし月に餘念もなかりけり
木の蔭に酒飲んで居る月の人
稍酔ひし月の酒宴や握飯
秋雨や二人汽車待つ停車場
汽車に馴れて濱名の月を眠りけり
汽車の窓にさしこむ須磨の月夜哉
ところ／＼月漏る森の小道哉

石塔に月漏る杉の小道哉
酒載せて月にたよふ舟見哉
森にそふて葉隠れ月の小道哉
海棧樓に別を惜む月夜哉
野分して片枝折れし松の月
花園の垣倒れたる野分哉
見送るや酔のさめたる舟の月
飛ぶ鷺の勢盡きし野分哉
並松の小枝吹き散る野分哉
乗物を昇きこむ月の野寺哉
三嶋迄駕を雇ひぬ秋の雨
夕風や三日月見ゆる船の窓
舟過る水の光や星月夜
山寺や松ばかりなる庭の月

野の中や只一本の杉の月

(地理)

絶頂に城構へたり秋の山
石門をくゝりぬけたり秋の山
其中に牧場のある花野哉
閑古鳥死んで淋しや秋の山
初沙や埠頭の内なる蒸汽船
秋の水岩白く魚動かざる

(動物)

訴へや廣嶋の鱸伊豫の鯛
逆したる松蟲なくや庭の草
馬追や追ひ出だされて縁に鳴く

馬追の蟬を追ふ聲すなり
 馬追の我貧乏を鳴く夜哉
 月明り馬追鳴くや西の窓
 片鶉交野の人家灯ともさす
 片鶉粟穂もくはで鳴きにけり
 鶉取る人は歸りぬ鳴く鶉
 粟くふて妻を思ふか飼鶉
 馬追の長き髭ふるラムブ哉
 縁側に馬追啼くや西瓜の灯
 秋の蚊の大粒なるが残りけり
 吸物も鱸さしみも鱸哉
 雨晴れて山は蜩夕榮す
 夕榮や蜩多き岡の松
 秋の蠅秋の蚊よりも猶憎し

蜩や谷中を出づる墓參
 蜩に翌の米なまき伏屋哉
 蜩や旅籠もすなる一軒家
 蜩や尼こゝに住む二十年
 蜩や神鳴晴れて又夕日
 蜩や木曾塚こゝに杉木立
 蜩や小説を書く田舎住
 蟬の佛壇の中に鳴出しぬ
 午前零時
 手洗へば蚯蚓鳴きやむ手水鉢
 午後八時
 蟲の聲二度目の運座始まりぬ
 竹垣の外は上野や蟲の聲
 二三匹鹿鳴く月の木の間哉

人を送りて歸るはしけや雁の聲
萩の月きりくすやがて鳴出ぬ
菊の杖蜻蛉のとまる處なり
醉兵士蜻蛉釣る子を叱りけり
番兵にとまらんとする蜻蛉哉
水草や蜻蛉とまる秋の花
蜻蛉の外は動かす沼の晝
土べたにくひついで居る蜻蛉哉
鯛や壘に上る夕日影
蜻蛉のとまり直して夕日哉
演習に人群るゝ岡や赤蜻蛉
襜褕臭き貧民窟や赤蜻蛉
蘆の葉の蜻蛉風無し蟹の泡
朝顔の種を干す日や鴨の聲

瀬戸船や晝餉にたかる秋の蠅
縫物や灯をかきたつる雁の聲
蝻や青物市のこぼれ菜に

元光院

秋の蚊や墓場に近き寺の庫裏
杉の木に鴨鳴きやんで夕焼す

元光院觀月會

庭上にラムプを置くや蟲の聲

元光院

蟲鳴くや月出でゝ猶暗き庭

同觀月會 六句

鴨のやうな辯舌墓のやうな面
問ふて曰く稻の稻子の鳴くや否や
蚯蚓鳴くとそれはおけらの一種なり

蚯蚓鳴く第四の紋に恨あり(理器)
かぎになり竿になる手やわたり鳥(葦)
くたびれし僧の躰や蟲の聲
蟲取る人に飛びつく蟲哉
鱸釣る藤江の浦を尋ねけり
一つつかむ手に猶攫む蟲哉
釣上し顔に鱸の雫かな
貧厨の光を生ず鱸哉
蟲焼く爺の話や嘘だらけ
駕早し根岸へ落る雁の聲
更くる夜や川を隔つる蟲の聲
稻掛けし榛の梢や鴟の聲
犬つれて狩に出る日や鴟の聲

統獲二句

むく鳥の聲聞きつけし林哉
打ち得たる色鳥美なり名を知らず
くたびれて歸る野道や蟲蹈む

(木)

柳散る秦淮と詩につくりけり
朝見れば柳散りけり辻行燈
柳散る地藏の頭なかりけり
今も猶柳散るなり山谷堀
大門の柳散りけり掃きにけり
柳散る芙蓉の庭や朝嵐
桃の實の桃源を出て流れけり
桃盗む子を叱りけり垣の内
蟲はみみて桃紅の腐り哉

旅籠屋の行燈暗し桃の蟲
道ばたの桃の木に實はなかりけり
越ヶ谷へ桃喰ひに行くつれも哉
桃の實を論語讀む子に分ちけり
桃を得て葡萄を望む患者哉

虚子寓

桐の葉のいまだ落ざる小庭哉
團栗のひとりころがる山路哉

午後二時

梨くふてしばらく憩ふ茶店哉
貧淋し喰へぬ木の實の落る音
池近き芝に柳の落葉哉
落ちたるは蟲ばみし桐の一葉哉
木犀や人は寐ねたる庭の月

元光院 八句

月出たり芙蓉の花の傍に
縁廣く折り曲りたる芙蓉哉
桐の葉の落ちても居らず庭の芝
詩人住む寺の座敷や木犀花
碁の音や芙蓉の花に灯のうつり
琵琶牙ゆや桂の花の散る匂ひ(觀月會)
鳥啼くや木陰の卓に柿を盛る(同)
木犀やしきりに匂ふ宵の程(同)
紅葉山の文庫保ちし人は誰(同)
燒栗のはねかけて行く先手哉
淋しげに柿くふは碁を知らざらん
勝ちさうになりて栗剝く暇哉

碁 三句

歸るさの柿を入れたる袂哉
かつ散らす庭の紅葉や四十雀
枝柿の青さをもらふ土産哉
柿を呼ぶうしろの方の列車哉
枝柿を提げて汽車待つ田夫哉

愚哉が持てる鹿の擧丸の袋に

ひとり寐の紅葉に冷えし夜もあらん
堂守の木の實を拾ふ掃除哉
明寺の垣潛りりる入子るや木木實實哉取
師の坊に猿の持て来る木實哉
山駕や雨さつと来る夕紅葉
駕昇や紅葉は焚かず茶碗酒
萎みたる芙蓉の花や磬の聲

鉢栽の小松が中の紅葉かな

「ほとよきす」ニ題ス

文と詩と松と紅葉とまじりたり
廢苑や芙蓉を覆ふ霞の風
紅葉見や女載せたる駕の雨

(草)

四國路の小さき馬や稻の花
萩吹くや崩れそめたる雲の峰
女郎花刀のこじりさはりけり
若君は駕にめされつ女郎花
朝顔の浅葱は薄き夜明哉
ものもいはで喰ひついたる西瓜哉
薄月夜西瓜を盗む心あり

試験所に西洋種の西瓜哉
すてゝある西瓜の皮や堂の前
隅田川西瓜の皮の流れけり
船頭の西瓜を切るや涼船
上手より西瓜流さん桂川
西瓜わらん桔梗の花のつばむ頃
君か代や五尺の稻の花盛
湯治二十日山を出づれば稻の花
此頃の五十三次稻の花
電信の街道筋や稻の花
一嵐おしろいの花倒れけり
實になりし鉢の朝顔花一つ
小庭 三句
野分待つ萩のけしきや花遅き

朝顔の垣に鴉のとまりけり
ひとり生えの草皆花となりけり

一本の葉雞頭の瘦たるを大事がりて

葉雞頭晝照草を引きにけり
朝顔の白きは晝にもかゝぬなり
汽車を下りる茸狩衆や稻荷山
日は暮れて芒の山を越えにけり
犬に逢ふ芒の山や村近き
押分て行けは行かるゝ萩の原

物價騰貴

唐辛子からき命をつなきけり
露草の中にたま〜野菊哉
實方の芒は刈らず村の者

午前四時

朝顔の垣や上野の山かつら

同六時

朝飯や日のあたりたる萩芒

同十時

紫菀活けて机に向ふ讀書哉

午後零時

雞頭に大砲ひびく日午なり

茶莫折て山を出づるや茸狩

鬼灯やいまだ楊家の娘ぶり

白菊と思ひし菊の黄を咲ぬ

朝顔や團十郎の名を惜む

枝折れて野分のあとの萩淋し

淋しさや芒の中の女郎花

起し繪を照す西瓜の燈籠哉

演習のあるべき村や稻の花
萩の花二百十日を氣遣ひぬ

聖代

仇花の南瓜にならぬばかりなり

赤

山里の葬藍も紺もなし

この頃の葬藍に定まりぬ

朝顔や紫しほる朝の雨

朝顔の鉢移したるうがひ哉

朝顔や松の梢の花一つ

朝顔にあさつての苔多き哉

入谷から出る朝顔の車哉

朝顔の白き蕾を尋ねけり

雞頭の短き影や蟻の穴

朝顔の花猶存す午の雨

元光院 二句

日おさへの通草の棚や檐のさき
盆裁の蓮の實いまだ飛ばすある
松高く通草の蔓のさがりたる

観月會準備 九句

板敷や豆積みあげし芋の側
芋は煮えず豆は釜中にありて泣
芋のあとに栗を蒸すべき指圖哉
井戸端や初茸洗ふ二三三人
テールブルを庭に据ゑたり草の花
僧の書あり瓶に活けたる秋の花
夕飯は芋でくひけり寺男
芋の用意酒の用意や人遅し

盆に分けて栗は少し芋と豆

元光院 二句

うら廣く秋の茄子も植ゑてあらん
武藏野を見下す崖や花芒

同観月會 八句

話ながら枝豆をくふあせり哉
茶の土瓶酒の土瓶や芋團子
芋くふて不平を鳴らす酒の酔
淋しさや木の子にまじる雁もどき
茸盡きて蓮根残る哀れなり
蘭の如き君子桂の如き儒者
芋阪の團子の起り尋ねけり
稲の晝をかき直さむる話哉
琵琶聴くや芋をくふたる顔もせず

葦

蓮の實の飛ばずに死し石もあり

元光院観月會 二句

老僧に通草をもらふ暇乞
卓上や狼藉として豆のから
花少し残れる萩を刈にけり
萩刈て百日草のあらはなり
捨舟や乞食夢見る蘆花の月
山深く通草腐りぬ秋の霜
佛壇に雞頭枯るゝ日數哉
温泉の道や通ひなれたる萩桔梗
赤菊の蕾 黄菊の蕾 哉
稻の香や汽車から見ゆる法隆寺
汽車を下りて遠き宿場や稻の花

汽車を下りて淋しき驛や花芒
萩刈りて芒淋しき小庭哉
カンテラや蕾少き市の菊
曼珠沙華郷居の叔父を訪ふ道に日哉
田の中の墓原いくつ曼珠沙華
日の落る野中の丘や曼珠沙華
明月の今年は遅き芒哉

小園 十句

雨だれの秋海棠にかゝりけり
朝顔にからむ鄰の瓢哉
雞頭をもらふて植ぬ野分過
雞頭や不折がくれし葉雞頭
引き残す松葉牡丹や秋の風
うしろ手に百日草や萩の花

二度生の低き桔梗や花多き
おしろいは妹のものよ俗な花
邪魔になる松を伐らばや草の花
朝顔の花木深しや松の中
人は徒歩観にくもりし草の花
鶴おろす鳥居の前や稲の花
濡れて行く柩の駕や稲の雨
末枯の中に花咲く薊哉
蓼の穂や溜壺一つ寺の跡
水車場を圍む小藪や烏瓜
獵の犬蘭の葎に探りけり
庭の菊天長節の薈哉
菊賣に天長節の朝日哉
御菊見の物運ぶらし女官だち

銀燭の燦爛として菊合
菊の壇氣に入つた菊はなかりけり
菊つくる五位の隠居や黒あばた
三錢と札の付いたる小菊哉

新聞 五旬

記者會す天長節の菊の酒
内閣を絲瓜にたとへ論すべく
新米の下落政府の瓦解哉
廣告や菊人形の園開き
朝顔や新聞くばる鈴の音
店先に賣れざる菊の盛哉
葉雞頭の首を投げたる天氣哉
市に得し草花植る夜半哉
藥草の花紫に霜早し

菊安し 天長節の後の市
唐辛子三十棒をくねりけり
俳諧の自然といふことを
合點ちや萩のうねりの其事か
西行に絲瓜の歌はなかりけり

冬

(時 候)

燒跡に小屋かけて居る寒さ哉
牢を出て再び寒し 娑婆の風
月の雲ちぎれて飛びし寒さ哉
亡き犬に犬小屋視く寒さ哉
亡き人のまほろし寒し 化粧の間
祝新婚
寒き夜を猶むつまじく契るべし
題猿圖 二句
飼猿よこの頃木曾の月寒し

人間を笑ふが如し年の暮
背戸寒く外日は日本海に向ひけりし
北の窓日本海を塞ぎけり
冬の宿狼聞て温泉のぬるき
熊に似て熊の皮著る穴の冬
櫻畫く冬の扇や物狂
灯を置かぬ狂女が部屋の寒さ哉
行く年の御幸を拜む狂女哉
一念の狂女となりぬ寒さ戀
緋いて冬の部に入る井華集
病中小照自題
寫し見る鏡中の人吾寒し
知らぬ人に道譲りたる寒さ哉
小説を草して獨り春を待つ

犬吠えて夫呼び起す寒夜哉
裁判の宣告のびて歳暮るい

新聞三旬

黒わくに知る人を見る寒さ哉
行く年の警察種や三頁
新築の窓に墨つく寒さ哉
伐株や紅盡きし冬の園
冬の朝鯉を求めて市に入る
御幸待つ冬の小村の国旗哉
宮城
大君の御留守を拜む神無月
乏しからぬ冬の松魚や日本橋
蕎麥屋出て永阪上る寒さ哉

悼

床の間に櫛の青き寒さ哉
金性の貧乏者よ年の暮
水草の花に小春の西日哉
土凍てゝ南天の實のこぼれけり
葬の灯の水田にうつる寒さ哉
牙ゆる夜の北斗を焦す狼烟哉
下總に一日遊ぶ小春哉
池の石に龜の居らざる小春哉
掬られけり大つごもりの蕎麥の饅
尿せしわらべを叱る霜夜哉
蜜柑買ふて里子見に行く小春哉
十に足らぬ子を寺へ遣る寒さ哉
狸々死
狸々の三七日頃か鐘氷る

松寒し樓門兀て矢大神

(人專)

祝新婚

神集め神の結びし縁なれや
むつかしく炭團に炭をつぎかけし
炭取の粉炭をはたく埃り哉
炭はねて眼をしばたゝく泪哉
炭積んで白河下る荷汽車哉
油買ふて炭買ふことを忘れたり
炭はねて始まらんとする茶の湯哉
炭取の炭にまじりぬ齒朶の屑
炭はねて七堂伽藍灰となりぬ
其炭の火より炭屋の焼けにけり

火消えて堅炭残る火鉢哉
 狼に引かぶりたる蒲團哉
 夜輿引の犬を吠えけり寺の犬
 竹かつく狂女に逢へり年の市
 寒垢離や狂女を見たる丑の時
 冬籠る若き狂女や座敷牢
 中山や狂女もこぞる御命講
 賽錢を^{狂女}投げ^{狂女}る^{狂女}や神の留守
 洩に狂女の戀の老なりし
 年惜む狂女が戀や豆の數
 年忘狂女に戀す醉心
 侃々も諤々も聞かず冬籠
 病中有感

遠東の夢見てさめる湯婆哉
 會堂に國旗立てたりクリスマス
 兎角して佝僂となりぬ冬籠
 凍え死ぬ人さへあるに猫の戀
 聲高に書讀む人よ冬籠
 見苦しき子をいとしむや赤頭巾
 かぶりそめて人に見らるゝ頭巾哉
 手爐さげて頭巾の人や寄席を出る
 かならずや頭巾めさるゝ祖翁の晝
 人丸は烏帽子芭蕉は頭巾にて
 忘れ置し頭巾の裏を見られけり
 間違へて笑ふ頭巾や客二人
 頭巾二人橋を渡りて別れけり

御法度の坊主頭や丸頭巾
著心の古き頭巾にしくはなし
こしらへて皆氣に入らぬ頭巾哉
西行の頭巾もめさす雪の不盡
醉ふて吟す東坡の頭巾脱んとす
辨慶は其頭巾こそ兜なれ
頭巾著て槍笠提けたり旅の僧
頭巾著て浄土の近き思ひあり
舊惡の心洗ふて頭巾哉
舊惡の形更へたる頭巾哉
打ちまじり同じ頭巾や村夫子
信心のはじめに著たる頭巾哉
十年の妾にひまやる頭巾哉
頭巾著て俵に上る指圖哉

頭巾著て物は心にさからはず
恰好な古き頭巾を買ひ得たり
戯作者のたぐひなるべし絹頭巾
冬籠和尚は物をのたまはず
言はんとして頭巾正しぬト師
頭巾著る忍ひ姿や落しさし
煤掃や冠の箱籠の箱
霜掩ひ蘇鐵は泣かすなりにけり
何の木そ霜よけしたる塀の内
牡丹ありし處なるべし霜掩ひ
霜よけの笹に風吹く鳥哉
霜よけや牡丹の花の一つ咲く
神前の桶の木に霜よけす
移し植ゑて霜よけしたる芭蕉哉

たらちねの遺愛の蜜柑霜よけす
霜早き根岸の庭や霜掩ひ
おちぶれて霜も防がぬ牡丹哉
耳糞の蜂になるまで冬籠
野が見ゆるガラス障子や冬籠
御旅立竈の神を見送らん
早稻田派の忘年会や神樂阪
本所區に編入されぬ冬住居
爐開や厠に近き四疊半
爐開の葉灰分つ鄰かな
爐開や細君老いて針仕事
山茶花や爐を開きたる南受
巨燧あけて蓋のしてある矢倉哉
爐開て残菊いけし一人哉

爐開や故人を會すふき膾
離れ家に爐開早し老一人
冬籠る今戸の家や色ガラス
夜神樂の面の古びや火の映り
埋火の側に老い行く獵夫哉
冬こもる灯のかすかなりの人や西の對
芭蕉忌に何の儀式もなかりけり
旅に病んで芭蕉忌と書く日記哉
芭蕉忌や芭蕉に媚びる人いやし
菫蕪に發句書かばや翁の日
無落款の芭蕉の像を祭りけり
芭蕉忌や我に派もなく傳もなし

札幌より林檎一箱送られて

一箱の林檎ゆゝしや冬籠

顔見せのこゝも田之助最良哉
風邪引の若き主や卯酒
御命講の花かつぎ行く夕日哉
傾城の顔見て過ぬ酉の市
芭蕉忌や其角嵐雪右左
ひとり言ぬるき湯婆をかへけり
寒垢離や兄におくれて母一人
盲子の笑顔淋しき頭巾哉
鉢叩だまつて行くは啞なるか
豊の繪師おとつれん冬籠
年忘座頭と替女の一座哉
誓ひには漏れぬ十夜の盲哉
神迎かたはの娘あはれなり
耳遠く目うすし何を年忘

あしらへば善く笑ふ子や赤頭巾
雑炊のきらひな妻や冬籠
鎌倉の大根畠や冬籠
冬籠もる人の多さよ上根岸
大磯によき人見たり冬籠
山に入る人便りなし冬籠
宿替の蕎麥を貰ふや冬籠
日あたりのよき部屋一つ冬籠
山陰や暗きになれて冬籠
咲き絶えし薔薇の心や冬籠
善く笑ふ夫婦ぐらしや冬籠
善く笑ふ男が來たり冬籠
笑ひかゝる見にくれたる頭巾哉
大殿の笑ひ聞えつ年忘

冬籠る部屋や盥の浮寐鳥
蕪村忌の風呂吹くふや鴨の側
冬籠盥になるゝ小鴨哉
蕪村忌の風呂吹盛るや臺所
縁側に切干切るや繪師か妻
竝べたる門松店や寺の前

(天文)

雪深し熊を誘ふ
霜の灯は狂女なるべし丑の時
風そふて木の雪落る夜半の音
病む人に戸あけて見する吹雪哉
町に入る吹雪の衰や旅の人

案内乞ふ合羽の雪や知らぬ人
武藏野も空も一つに吹雪哉
日のさゝぬ四角な庭や霜柱
菊も刈り薄も刈りぬ霜柱
水仙は咲かでやみけり霜柱
狼の小便したり草の霜
惱み伏す主をはげます吹雪哉
遠東の雪に馴れたる軍馬哉
法官や僻地に老いて髭の霜
松明に雪のちらつく山路哉
瓦斯燈や柳につもる夜の雪
新聞ノ一
筆に聲あり霰の竹を打つ如し
風や芭蕉の緑吹き盡す

風や松葉吹き散る能舞臺
亡き妻を夢に見る夜や雪五尺
移徙やきのふ植ゑたる松の雪
雞頭の黒きにそゞ時雨かな
返り咲く花何々ぞ初時雨
藁頭巾の雪ふるふたる戸口哉
人行かぬ北の家陰や霜柱
鶴の巢を傾けてふる霰哉
口こはき馬に乗たる霰哉
追立つるかたはの馬や夕時雨
鷺の子の鬼をつかむ霰哉
初雪の年の内にはふらざりし
道に坐る瞽女と子供と小夜時雨
小座頭のたはれをかしや雪磔

大雪の鴉も飛ばぬ野山哉
逢ふ人の皆大雪と申しけり？
隠れ住む古主を訪ふや雪の村
城門の釘大いなる霰哉
蓑笠や小門を出づる雪の人

(地理)

潮流の北より來る氷哉
明神の狐と現じ氷哉
枯菊に氷捨てたる朝日哉
水鉢の氷を碎く星月夜
氷噲む狂女が胸の燄かな
人絶えて狂女に逢ひし枯野哉
道哲の寺を過ぐれば冬田哉

田の泥に雁の足跡凍りけり
水鉢の水捨てたる葉蘭哉
透き通る氷の中の紅葉哉
金州の南門見ゆる枯野哉
雉つけて歸る一騎や冬の原
枇杷の實の僅に青き氷柱哉
地租増徴
此邊も税の増したる冬田哉
不忍
東臺の松杉青き氷哉
こゝらにも人住みけるよ冬の山
(動物)
千鳥吹く日本海の嵐哉

關守も居らず千鳥も鳴かずなりぬ
磯の松に千鳥鳴くべき月夜哉
三味線に千鳥鳴く夜や先斗町
二群に分れて返す千鳥哉
光琳やう水つ紺く青し水に白千鳥
須磨の宿の欄屏風に描れる千鳥哉
鴛鴦の畫の襖にこもる狂女哉
初五文字のすわらでやみぬ海鼠の句
碧梧桐列集
狼に寒鮒を獻す獺の衆
勝公事の海鼠を譏る河豚哉
清國亡命者に贈
鯨汁しばらく勇を養はん
聖堂やひつそりとして鶴鶴

木兔の鳴きやむ杉の叢哉
杜父魚のまうけ少きたつき哉
から鮭の阪東武士が最期哉
鷹据うる人に逢ひけり原の中
御社や庭火に遠き浮寮鳥
海鼠眼なしふくとの面を憎みけり
牡蠣汁や居續けしたる二日酔
屠蘇強ふや鴨汁盡きて蠣の汁
あざ笑ふ花和尚の聲やふくと汁
乾鮭や頭は剃らぬ世捨人

(木)

紅葉散る山の日和や杉の露
山茶花に新聞遅き場末哉

徳川の靈屋の側や歸花
活けて久しき茶の花散りぬ土達磨
砂村や稻荷を祭る冬木立
山茶花の垣に銀杏の落葉哉
大木の二本竝んで落葉哉
茶の花や庭のうしろに東山
山茶花に南受ける書齋哉
北庭や日影乏しき枇杷の花
冬木立煙の立たぬ小村哉
門を入りて飛石遠き落葉哉

(草)

大根引て葱島は荒れに島けり
兩岸に大根洗ふ流れ哉

捷報の來し朝なり大根曳
門前の大根引くなり村役場
大根を引く畑にそふて散歩哉
草枯や狼の糞熊の糞
冬枯や熊祭る子の蝦夷錦
霜枯や狂女に吠ゆる村の犬
夕顔の枯れにし宿や狂女住む
きのふ見し狂女も居らず枯芒
鐵砲に兎かけたり枯薄
日の照らぬ枇杷の木陰や石落の花
芭蕉枯れて縁乏しき小庭哉
冬枯の根岸を訪ふや繪師か家
草枯るゝ庭の日向や洗濯す
草枯るゝ賤の垣根や枸杞赤し

庭に干す土人形や石落の花
金藏の南壁におもてたるや石落の花
木を伐て根深島に倒しけり
龍膽や芒の中に枯れ残る
蕪引く妻もあるらん大根引
萩刈りし庭のかなたや枯芒
狗の子の小便するや石落の花
鶏頭のとうく枯てしまひけり
からけたる繩のゆるみや枯芒
露石より天王寺蕪を送られて
蕪肥えたり蕪村生れし村の土
濕氣多き根岸の庭や冬の菊
枯葛や賣家覗く破れ門
蕪引て耕の蕪ばかり残りけり

明治卅二年

新年

かたよせて蓬萊小し梅がもと
蓬萊に一斗の酒を盡しけり
蓬萊の蜜柑ころげし座敷哉
蓬萊の一間明るし歌かるた
蓬萊に我生は死な居る今年哉
蓬萊のかち栗かじる七日哉
蓬萊にくふべきものを探りけり
蓬萊や名士あつまる上根岸

蓬萊の小さき山を崩しけり
蓬萊の齒朶踏みはづす鼠哉

夷大黒角力圖 二句

福祿が行司に立つや屠蘇の酔
年徳と布袋とどつと笑ひけり
飾焼く座敷の庭の日向哉
枯菊にどんどの灰のかゝりけり
福引のあとで素人の落語哉
存分に水祝はしや思ひ妻
つめたくて嬉しきものや水祝
風邪引の男に水を祝ひけり
門口や這入る處を水祝
樽提けて宵寐起すや水祝
水祝戀の敵と名のりけり

心安き友やしたゝか水祝
年若き肌うつくし水祝
おとつれる昔念者や水祝
逃まはる跛の聲や水祝
尋常に水祝はれん酒の酔
回向院の相撲はじまる松の内
銀座出る新聞賣や初鴉
歌舞伎座の前通りけり初芝居
飾りかけし馬車集ひけり日本橋
兩側に長き三井の飾り哉
元日の病者見舞ふや駿河臺
門松やわがほとゝぎす發行所
年禮や鳴翁住める眞砂町
門松に右し左す矢來町

子日晝讀

烏帽子著た人ばかりなり初小松曳

晝讀

やぶ入のみやけをさげて來りけり
初芝居團十郎の烏帽子かな
書初に鶴の歌書く檀紙哉
土佐人の紙布を著て來る御慶哉
遣羽子や五人の中の思ひ人
遣羽子や往來の繁き抜小路
遣羽子や鼻の白粉頬の墨
遣羽子の尻叩きけり泣きにけり
手鞠つき羽子遣る程になりけり
たらし髪羽子遣るあこに菓子やらん
遣羽子や邪魔して過る白袴隊

遣羽子の風に上手を盡しけり
遣羽子や夕飯くふて歌かるた
遣羽子に負けてくやしき夕餉哉
乳母が子の袴著て來る御慶哉
蓬萊や襖あけたる病の間
歌かるた戀ならなくに動悸哉
歌かるた女ばかりの夜は更けぬ
参内の時間に近き雑煮哉
神宮の判すわりけり初曆
新宅に掛くる釘なし初曆
初曆一枚あけてなかめけり
早ぐりの年數表や初曆
初曆今年も人にもらひけり
今年は青き標紙や初曆

所思
初曆五月の中に死ぬ日あり
大福や家につたはる叢釜
若餅や齋の七日過ぎて後
借著して湯に行く旅の松の内

春

(時候)

春の夜の旅草臥や道中畫
行き過ぎし短き驛や海のと
春の夜の燈心長き行燈哉
春の旅小き山を越えにけり
春寒き縁に乾かぬ鑄形哉
餅買ひにやりけり春の伊勢旅籠
蜜柑くふて咳入春の風邪哉
春寒き手を握りたる別哉
火鉢火なし手をひっこめる餘寒哉

橋の側に假橋かゝる暮の春

懷舊

春の夜の酒に更けしも昔哉
春の夜の蒲團かぶりて話しけり
短冊に春の句書いて破りけり
料理屋を兼ねたる春の宿屋哉
油畫の極彩色や春の宿

草庵 三句

雪の繪を春も掛けたる埃哉
蓑掛けし病の牀や日の永き
春寒き机の下の湯婆哉
夏近き俳句の會や夏の題
春の夜や妻にならうの私語
亡き妻のまほろし見たり春の宵

頭痛すと先づ寐る妻や春の宵
善き妻の春の社に詣でけり
詠人を知らさる春の秀歌哉
蒲團著て手紙書くなり春の風邪

(人事)

接木して縁に棗駝か物語
吝き人の善き柿得たる接木哉
名を得たる接木の親爺履ひけり
後園の接木を覗く散歩哉
ぬれなから接木芽を出す嬉しさよ
わがわがの接木して居る小雨哉
桃に梅を杏に梨をつきし哉
そぼふるや接木枯れたる庭淋し

垣こしに接穂與へし鄰哉
接木して歸去來の賦を誦しけり
十本の二本つきたる接穂哉
水仙の花萎みたる接木哉
人多き庭に佛の別哉
雛祭る田舎の家や桃の雨
雛立て、花屋呼び込む戸口哉
まじへ買ふ桃と櫻や雛祭
天冠を雛に著せたり桃の花
雛棚に櫻活けたり三段目
灯ともせは雛に影あり一つつゝ
雛過ぎて瓶の櫻の盛り哉
二番目の娘みゆよし雛の祭
母方は善き家柄や雛祭

雛祭姉の娘に惚れて見ん
手に握る彼岸の小錢こぼしけり
ふらでやみし朧月夜や薪能
鉢の木や薪に遠き最明寺
薪燃えて静の顔を照しけり
薪能京より叔父のまかりけり
鹿來る樂屋の外や薪能
牙え返る春三日笠風や薪能
小夜更し鼓の音や薪能
貫ひ子の家になじむや雛祭
人老いて末子可愛し雛祭
疱瘡の神へ彼岸詣のついで哉
鮎草津の驛は荒れにけり
夏近き膳所の舍りや鮎草

春寒き南近江や鮎草
尙白の家に會して鮎草
旅人に鮎の鮎の好みあり
孝行なる漁師ありけり鮎草
鮎草鮎草に片目の由来あり
贈られし鮎を鮎につくりけり
海苔を干す家ばかりなり南向
畫にかきし海苔採り舟の女哉
梅捨てし櫻活けたる雛哉
庭に出でし物種蒔くや病上り
辨當くふて青きを踏んで遊びけり
ふらこゝの遊びに飽きし女哉
摘草や根岸をいでし田圃道
海苔取の知らず顔なる沙干哉

紅のもすそかゝげぬ沙干人
鯛得て舟に戻るや沙干狩
貝のつきし岩あらはるゝ沙干哉
汽車に乗りて沙干の濱を通りけり
雲に入る沙干の人や安房の山
末の子や沙干の留守の雛遊
沙干より今歸りたる鄰哉
沙干狩の窓通りけり窓の外
二舟に沙干の連を分ちけり
さかしらの桑駝が妻の接木哉
つれて來し嫁の最良や御忌詣
さそはれし妻を遣りけり二の替

(天文)

春雨や傘さして見る繪草紙屋
春の風帆のなき舟も流れけり
楠公の墓に屋根あり春の雨
我胸に陽炎もゆる思ひ哉
由良さんを呼ぶ聲更ぬ朧月
剝製の山鳥の尾や春の風
碁に負けて忍ぶ戀路や春の雨
小道して廓に出でぬ春の月
小芝居の幟濡れけり春の雨
雪残る頂一つ國境
霞む日の湖見渡すや橋半
春の雪胡葱畑に積りにけり

會の日や晴れて又ふる春の雨
人を呼ぶ矢場の女や朧月
中入や芝居出づれば春の雨
垣間見やそらたきもる朧月
麥畑の南に低し朧月
氣に入らぬ遊女眠りぬ朧月
宴はてゝ車呼ぶなり春の月
そゝろありく朧月夜や酒の酔
羽衣の太鼓聞えぬ春の月
惟光をひとり供したり朧月
春の月戀する人を照しけり
一里行く春の月夜や村芝居
吉原の裏を通るや春の月
初雷の汽車の響に紛れけり

初雷や物に驚く病み上り
初雷の二つばかりで止みにけり
初雷を恐るゝ妻や針仕事
不忍に鷓首の船や春の風
春風や嫁を載せたる飾り馬
江の嶋へ女の旅や春の風
下駄借りて宿屋出づるや朧月
草庵
春雨のふるき小笠や霞の句
よき人の小歌聞きたけり朧月
灯一つ星二つ三つ夕霞

(地理)

手に鉄刀何摘む人か春の園

芹目高乏しき水のぬるみけり
臺の立つ菜を洗ひけり温む水
裏溝やお玉杓子の水ぬるむ
浮き上る泥鰌の泡や水ぬるむ
水張る谷の小川や末ぬるむ
ぬるむかと寄れば清水の水哉
水ぬるむ南に鯉のつどひけり
馬の沓沈みてぬるむ清水哉
上水のぬるみし粥の名残哉
水草は底にもゆらん水温む
春の山越えて日高き疲れ哉

(動物)

古池に蛙とびこむ俳畫哉

白魚や氷を捨つる佃嶋
百千鳥柳少き關屋哉
やゝ古き犬の屍や蛙の子
残る鴨何番の花置火燧
猫の戀鄰の屋根へ移りけり
我心猫にうつりてうかるゝか
手に滿つる蛭うれしや友を呼ぶ
雀子や馴れて物くふ掌
小鮎釣橋より上のわたり哉
子雲雀のそだつ日頃や麥の風
水涸て草生えし田の田螺哉
隠れ住む芹生の里や田螺和
雉の子を取りて歸るや雉の聲

(なつかしき津守の里
の田螺和
燕村)

知らぬ野を通る旅路や雉の聲
尾をかはす雉の番や臺の上
蛇にまかれて鳴くか雉の聲
雉の尾のつゝじにさはる長さ哉
野を焼いて雉子は啼かずなりにけり
雉の子をつかんで歸る童哉
もてなしの筍飯や田螺和
鷹鳩と化す藤房は容隠れられけり
鷹の尾に隼の尾を繼ぎにけり
カナリヤに餌やる蠶飼の暇かな
雉鳴て日の出る旅の朝かな
人の目を蝥したる蜂の怒哉
蜂を飼ふ鄰は蜂を憎む哉
蜂の巢のありて蜂飛ぶ竹格子

西洋の花に蜂去り蜂來る
蜂の巢や人の到らぬ堂の裏
花多く蜜蜂を飼ふ小家哉
熊蜂の巢を打落す恐哉
憎まるゝ小僧は蜂にさゝれけり
蜂にさゝれ大聲あげて泣く子哉
蜂追ふて蜂の巢を取る子供哉
蜂の子の蜂になること遅き哉
歸る鳥に行き違ひけり清水越
行く鳥や傾城國に歸る船
山雀を送る雀の夫婦かな
もろともに歸れと鶺鴒を放ちけり
鷹鳩になりけり鳥は歸りけり
飼鳥は籠に馴けり鳥歸る

鳥歸る蝦夷の廣野や集治監
歸る鳥歸らぬ鳥もまじりけり
鐵砲のとどかぬ空や鳥歸る
恙なく鳥は歸りぬ小鳥網
灯暗く蛙聞く夜や寫し物
蜂の巢に蜂の居らざる日和哉
接木する片手に蜂を拂ひけり
曇りぬと妻の話や遠蛙
蠶飼する此頃妻のやつれ哉

(木)

盜或る夜桃の小村を掠め去る
花の宴琴彈かさりし不興かな
李白く桃紅の裏家かな

池の端に書畫の會あり遅櫻
水邊の梅を畫きし屏風哉
背戸竝ぶ小家々々や桃の花
惜氣なく梅折りくれぬ寺男
小坊主や花見の供のひもじ顔
子を負ふた手に櫻持つうしろ哉
苔多き梅の老木や二三輪
百姓の娘うつくし桃の花
花に遠く手を引かれたる病者哉
梅咲て手を續きかへし佛哉
渡し場に橋の出來たる柳哉
徒歩で行く大師詣や梨の花
紅梅や匠か宿の古烏帽子
紅梅の散りし軒端や雲雀籠

(紅梅や司なたま
ふ古匠 鳴雪)

古庭の古き匂ひや沈丁花
紅梅や指貫青き上達部
昔爺と婆と住みけり桃の花
木蓮の花は落ちたる青芽哉
枯れし木の枯れざる枝や芽をふきわに若芽哉
下りたちて見廻る庭の木の芽哉
木芽ふく朽木何とも知れぬなり
おしめ干す低き小枝の木の芽哉
百姓の庭も垣根も木の芽哉
草鞋はく園女か旅や木の芽山哉
新宅や植木芽をふく窓の先
桐の木の低き芽を皆缺きにけり
雷の始めて青き木芽哉
木々の芽や新宅の庭とゝのはす

夜櫻や上野を通る辰り道
九時の鐘に茶店を鎖す櫻かな
不忍
辨天の樓門赤き櫻哉
風起る落花の中の群集哉
宮方や花の御宴の主人役
異様なる粧ひの人の花見哉
上野
銅像に集まる人や花の山
料理屋の紅梅散りて櫻哉
行きくて櫻なくなる堤哉
吉原や雨の夜櫻蛇目傘
工夫して花にランプを吊しけり
二枝の椿くねりて活けられず

菱掛けて椿活けたる書齋哉
白桃や日永うして西王母
旅立のあとに淋しき柳哉
つゝし咲く庭や昔の御本陣
錢盡きて京に入る日や花盛
文君の酒屋ありける柳哉
白梅や机据ゑたる窓の外

観山翁二十五回忌

軸掛けて椿活けたる忌日哉

吳春繪

繪巻物三月の部は花見なり
海棠の鉢をかゝへて歩行きけり
海棠の鉢植置きし衣桁哉

遠足の十人ばかり花の雨
花の歌添へし吉野の寫真哉
船形に造りし松の緑哉
海棠に障子立てたる化粧哉
海棠に軒の細き美人哉
海棠やともし火うつる閨の窓
海棠に遊ぶ二人の禿哉
海棠やきのふ娶りし宿の妻
紅梅や返歌待ち居る文使
星消えて曉梅の寒さかな

(草)

繪を習ふ繪師か娘や藤の花
菜の花や繪馬賣る店の夕日影

下萌や音無川の上流れ
角力場は荒れたるまゝの董哉
董より小き花を摘にけり
手に餘るげんくの東捨にけり

喜人見訪

葦剪つて酒借りに行く鄰哉
落の莖ほうけて瓶にさゝれけり
手に提げし藤土につくうれしさよ
橋際に藤棚のある茶店哉
大根の花さく彼岸日和哉
雀啼く大根の花やひな曇
大根の一本咲くや榛の下
大根の花散る里や雛祭
桑の芽の僅に青し花大根

蠶飼せぬ村静なり花大根
寒食の里や大根の花盛
菜の花や大根の花はうら淋し
大根の花に淋しや西の京
門口や大根花咲く百姓家
桃散るや大根の花は實になりぬ
大根の花の鄰や春大根
摘み残す薺は花にあらはれぬ
蒲公英に胡粉こぼすや土細工
投入や椿山吹調和せず
雨晴れて山吹黄なる舊哉
山吹の散りそめて皆散にけり
山吹の咲くや武藏の玉川に
山吹の花流れよる芥かな

山吹や鶉飼ふたる市の家
干傘に山吹散るや狭き庭
庭先の山吹を折る法事かな
山吹や池に臨みて亭一つ
杉垣に山吹咲ける裏戸哉
山吹の上にしだるゝ柳かな
物の芽の中に桔梗の芽出し哉
カナリヤの餌に束ねたるはこべ哉
家買ふて古菊の根を分ちけり
紫の花に刺ある薊哉
市へ行く植木車や櫻草
道芝や蒲公英の花低く咲く
貝塚へ曲る小道の藁かな
藤棚のある料理屋や町はづれ

大津晝に似た塗笠や藤の花
茶を飲んで菊の根分の疲哉

夏

(時 候)

古澤や月に涼しき鷺の夢
短夜の雞鳴いて夢惡し
短夜や胃の腑に飯の残りたる
熊阪は逃げて夏の夜明けにけり
六月の杉の葉や二荒山
鄙の家に赤き花さく暑さ哉
暑き日や池を掘らんと思ひけり
夕顔の花にさめたる暑さ哉
庭さききに暑し芒の亂髪

暑き日の夕や花に濯ぎけり
避暑に来る西洋人の夫婦哉
米人の避暑に伴ふ書生哉
避暑の地や行逢ふ人の見知顔
腐り居る暑中見舞の卵かな
暑き夜を籠の鶉の眠らざる
手をあてし手の腹涼し鐘の疣
携へし避暑案内や汽車の中
海に映る一番星や濱涼し

(人 事)

爲山晝いて皆が讚する扇哉
橋詰や此頃出來し水店
裕著て馳せ行くもあり橋供養

湯あみせし旅草臥や蚊帳の中
五女ありて後の男や初轍
先生の夏羽織脱く揮毫哉
ちりかゝる松の落葉や夏羽織
夏羽織露月は醫者になりけり

夏羽織十句ヲ作ルニ右ノ一句碧梧桐ニモアリ一字ヲ違ヘズ奇トイフ
ベン

脱いで置く夏の羽織や芝居茶屋
夏羽織琵琶湖の風に吹かれけり
梅干すや庭にしたゝる紫蘇の汁
蟲干に燕村の偽筆掛りけり
四足の瓜も茄子も草の市
しかくと買れても行かず草の市
下女つれて物買ふ人や草の市

草市の蓮にたまる埃かな
草市や柳の下の燈籠店
草市や燈籠白き夕まくれ
草市の中を葬禮通りけり
草市の草しほみたる日向哉
草の市價安くてあはれなり
生ぬるき振舞水や市の家
ビードロに洗ひ鱧を並べけり
かしこまる角力取共や夏羽織
江の嶋に遊ぶ支度や夏羽織
挨拶や夏の羽織もつくろはず
此頃の會社つとめや夏羽織
瀧殿のしぶきや料紙硯箱
魚多き海邊の里に夏断かな

夏衾をし鳥の晝もなかりけり
アンペラの夏帽古き醫師哉
夏帽に桔梗さしたる生徒哉
ざれ歌の手跡めでたき扇哉
星の名を善く知る人や門涼
澁紙に澁引く人や晝寐起

(天文)

五月雨や小き家の土細工
田植見る二階の窓や五月雨
椎の舎の主病みたり五月雨
白檠や寫本の窓の時明り
雲の峰水なき川を渡りけり

薰風や松嶋の記をひ吹るがへす
道ばたの掘かけ井や夏の月

(地理)

かたまりて黄なる花さく夏野哉
夏川の浅きに浸す紙そかな

(動物)

傘さして賣家見るやなめくじり
賀卒業
十年の苦學を思ふ螢哉
水鳥に水鳥の巢は知られけり
巢立して鴉も居らざるから巢哉
鳴の子の羽ばたきしたる浅み哉

鴨の子の泳ぎぞめする濁り哉
鴨の子の流れんとする水嵩哉
鶏の子は親の真似してくゞりけり
鴨の子を二つ握りし童哉
鴨の子を盃に飼ふや錢葵
鎌倉や日蓮去つて初堅魚
螢籠行燈に遠くつるしけり
何鳥と知らぬ浮巢の卵かな

(木)

竹筍白鶴圖

青梅や病より起つ林和靖
古庭や桐の花散る井戸の蓋
日光の古き宿屋や桐の花

花桐をの蒔繪にゆしかたしるき手箱哉
唐紙や銀箔元し桐の花
桐老いて琴にもならず花咲きぬ
塀の内に桐の花咲く明地哉
城跡や麥の畑の桐の花
桐の花めでたき事のある小家
花桐や賞を賜はる村の長
屋根低き物置小屋や桐の花
蛇飛んで蜜柑の花のこぼれけり

(草)

牡丹畫いて繪具は皿に残りけり
薔薇の畫のかきさしてある畫室哉
百姓の背戸に咲けり杜若

橋低く蓮の浮葉の二ツ三ツ
夏引その亂れや二十八天下

牡丹もらひて 五句

薄様に花包みある牡丹哉
人力に乗せて牡丹のゆるぎ哉

鉢植の牡丹もらひし病哉
一輪の牡丹かゝやく病間哉

政宗の額の下なり牡丹鉢
病中

厄月の庭に咲いたる牡丹哉

病中時鳥を閉きて

床の間の牡丹の闇や時鳥

牡丹散つて芭蕉の像を残りける
二片散つて牡丹の形變りけり

林檎くふて牡丹の前に死なん哉

牡丹句録の終りに

三日にして牡丹散りたる句録哉

夏草にまじりて早き桔梗哉

紫陽花の庵に年経る俳士哉

此村は帝國黨や瓜茄子

學校の敷地になりぬ瓜畑

瓜番を化かしに來たる狐かな

瓜の籠茄子の籠や市の雨

水清く瓜肥えし里に隠れけり

胡瓜生節善き酒ありて俗ならず

干瓜の鹽の乾きや日照草

茄子の籃の上荷に長き哉

霞養して園ふ流や冷瓜

筵敷く村の芝居や瓜の皮
瓜喰ふて旅の勞れや野の茶店
鉢植の南瓜をつくる床屋哉
鉢植の南瓜をとめし一つ哉
鉢植の南瓜傾く重^竹み^の哉^杖
筍と鍬と笠とを盡きけり
百合活けて百合の歌詠む湯治哉
鄙の家^{不忍}に翡翠來るや花菖蒲
夏草や自轉車の輪立犬の糞
沼古りし蘆の茂や四手小屋

秋

(時候)

あて人の留守に秋來る都かな
大阪「車百合」發刊
俳諧の西の奉行や月の秋
休暇盡きて二百十日の船出かな
曉のひややかな雲流れけり
軍艦を見に行^く舟や秋日和
長き夜や夫は善く寐て子守唄
舟唄のやんで物いふ夜寒かな
水瓶に茶碗落すや朝寒み

水海の秋の小魚を奉る

淡路町百物店

質筆をかけて灯ともす夜寒哉

講武所

柿店の前を過行く夜寒哉

小川町五十稻荷 二句

きんつはの行燈暗き夜寒哉

縁日の古著屋多き夜寒哉

三階の灯を消しに行く夜寒哉

上野入口

電気灯明るき山の夜寒哉

上野

見下せば灯の無き町の夜寒哉

新坂上

新坂下

交番の交代時の夜寒哉

上根岸

櫛の木の中に灯ともる夜寒哉

歸塵 二句

暗やみに我門敲く夜寒哉

車引のお歸りと呼ぶ夜寒哉

星飛んで懐に入る夜寒哉

秋の夜の夢に詩を得し寐覺哉

病床に上野を見るや秋日和

舟もなき川の廣さや空の秋

(人事)

燈籠さげて橋行く人や水の影

魂棚に團子供へて拜みけり
鵲の橋に柱はなかりけり
蟲送る松明森に隠れけり
馬叱る新酒の酔や頬冠
徳利の頬冠りする案山子哉
盆過の月明かに雨の音
雨雲の月をかすめし踊哉
攝待のむすびくひつゝ別れけり
老禪師柚味噌の狂歌詠まれたり
白嘲
十年の狂態今に案山子哉
妹に七夕星を教へけり
松茸の乏しくなりて柚味噌哉
善き酒を吝む主やひしこ漬

山形のし梅といふ菓子

東柚べし西のし梅や分角力
冷酒や柚味噌を炙る古火桶
六句目にさし合のある柚味噌哉
赤菊をそへし柚味噌の贈物
尻焦げし柚味噌の釜や古壘
膳もなき壘の上の柚味噌哉
釜こげる柚子の上味噌つめたかり
柚味噌焼く雨の夕や菊百句
禁酒して茶の道に入る柚味噌哉
病中二句
粥にする天長節の小豆飯
人も來ぬ天長節の病哉
小包の歪みし柚味噌とり出しぬ